
魔砲使いと日陰の少女～Locked girl.

紅魔館雑務総括

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔砲使いと日陰の少女 Lock ed girl .

【Nコード】

N 8 5 2 9 D

【作者名】

紅魔館雑務総括

【あらすじ】

「知識まみれの日陰の少女」パチュリー・ノーレッジが「普通の魔法使い」霧雨魔理沙と恋に落ちるお話。どっちもツンデレなんです。・・・でもどちらかというと魔理沙の方が素直だったr(ry. . . ええと、ゴメンナサイ。「Lock ed , girl」は「ラクト・ガール」って読むんです。ビートまりお様の「ラクト・ガール」とあまね様の「Drizzly , rain」に感化された小説馬鹿が書きました。このお話は「東方Project」を基盤にした二次創作ものです。

前編「きっかけ」(前書き)

東方知らない人・嫌いな人・魔理沙orパチエは俺の嫁って人はモ
ッドーレボタンを押していただけると。

前編「きっかけ」

紅霧異変からしばらくしてから。

紅魔館大図書館で、「普通の魔法使い」霧雨 魔理沙は「動かない大図書館」パチュリー・ノーレッジの隣で、魔道書を読み耽っていた。そんな時、

「なあ、パチュリー」

「・・・なに？」

「・・・一緒に、外にでも出かけないか？」

「嫌よ」

「なんでだよ」

「私は明るいのが嫌いなの」

「そんなこと言わずに、さ？私と、庭でも一緒に行こうぜ」

「しつこいわね。嫌よ。何度言われようも行かないから。」

「そうか・・・。すまない、しつこくしちゃって。」

そう言って、また魔理沙は魔道書に目を移した。

「じゃあ、私はもう帰るぜ」

「・・・お好きにどうぞ。私は気に止めたりしないから」

「あと、この魔道書、借りてくぜ」魔理沙は俯き、五冊ほどの魔道書を持ってきていた布袋にしまおうとした。そして、

「だめ。そればかりは気に止めるわ」

パチュリーが手を伸ばした。

「もう家にあつた分は、全部返したぜ」

俯いたままなので、パチュリーは魔理沙の顔を見られない。

「だからなんだって言うのよ」

「これ借りてなかったら、お前のところに行く絶対な理由が、なくなっちゃうじゃねえか」

いまだ俯く魔理沙がポツリと呟いた。

「・・・？」

その言葉がパチュリーには聞き取ることができず、小首をかしげた。
「ねえ、魔理沙。なんていったの？」

「・・・なんでも、ないぜ」

「そう・・・？とても、そういう風には見えないけれど」

顔を上げると、魔理沙はいつもどおり、向日葵ひまわりの咲いたような笑顔で、

「どこが、何でもなさそうなんだ？ほら、私はこんなにも元気だぜ？」

そういうと、本の詰まった袋を持ってくるくと回って見せた。

「そこが、なにかありそうなのよ、魔理沙。・・・何か、無理でもしてるんじゃないの？」

「じゃあな、パチュリー！」

本を持ったまま、扉から出ていった。

「あ、魔理沙！・・・また、してやられた・・・。」

パチュリーが『人を追いかける直前の構え』のまま、顔と肩だけをしょんぼりとさせていた。

しかし、その口元は、どこか悲しみや怒りとは違う、何か幸せを含んだような、そんな感じ。

「お茶をお持ちしたのに、魔理沙さん、出ていっちゃいましたよ？」

魔理沙の出ていったその扉から現れたのは、赤い髪の小悪魔。大図書館の本のチェック、パチュリーの紅茶の準備など、主に紅魔館大図書館関連の仕事を一手に背負う豪い紅魔館えらの従者である。ただひとつ哀れむ点があるとすれば、

「いいのよ、小悪魔。」

名前が、ないこと。

そして、それを何とも思わないこと。

春を伝えるだけのリリーホワイトだって、名前はある。

名もない子悪魔は、名が無い事への辛さも知らず、今まで百年近く

紅魔館の中でした。

「じゃあ、この紅茶、私がもらっておきま・・・」

「それはだめ。レミイを呼んできて頂戴。」

「・・・はい。」

「主人に返事をするときはもつとはつきり。間の抜けた声は人を不快にするわ」

「はい、わかりました、パチュリー様。」

そしてしばらくして。

「パチエ、呼んだ？」

紅めの服を身にまとった、銀髪の少女・・・否。幼女が図書館の扉をたたいた。

「どうぞ、レミイ。遅かったじゃないの」

彼女の名は、レミリア・スカーレット。彼女こそ、この紅魔館の主である。

「ごめんごめん。ちょっと白黒を追い出すのに手間取っちゃって」

「あなたらしくもないわね、レミイ。はい、紅茶」

パチュリーはおもむろにティーカップをレミリアに差し出した。

「そうかしら。あの白黒、相当強くなってるわよ。霧の異変以来」

レミリアは紅茶を受け取り、口にする。

「私の書斎で本を読んでるのよ？弾幕ごっこが強くなって当然」

「うっわ、この紅茶冷めてるわ。咲夜！入れなおしてきて頂戴！・・・ずいぶん自信ねえ」

レミリアが言うや否や、ティーカップ消失。

「お嬢様、紅茶をお持ちしました」

唐突に銀髪のメイドが現れ、消失したティーカップに湯気の立つ紅茶を淹れて来た。

「ありがと、下がっていいわよ咲夜」

「失礼いたします、お嬢様」

咲夜と呼ばれたメイドは、紅魔館のメイド長。

主人であるレミリアの身の回りの世話はもちろんの事、紅魔館の顔としての役目もきっちり果たして、しかし決して主人に対し過度に自慢することも無い。いわば「完全で瀟洒なメイド」というやつである。

「ところで、レミィ」

パチュリーが呼び出した理由は、ただ一緒に紅茶を飲むためではない。

「なに？パチエ。そんなに改まって」

「ちよっと、相談があるの」

T
o
B
e
C
o
n
t
i
n
u
e
d
．．．

前編「きっかけ」(後書き)

2008/5/2 修正。

るいーじさん、ご指摘どうもです。

なにぶん三月精読んでないもので・・・ショップがないのです。
こんどあまぞんあたりで買って読みますから許してください

中編「拒絶」(前書き)

魔理沙がデレを、パチエがツンを見せ始めるところ。
たぶん次回じゃ終わらない気がします。

中編「拒絶」

ある日の夜、霧雨魔導具店。

・・・要するに、魔理沙の家。

魔理沙は、悩んでいた。というより、想っていた。

「・・・パチュリー」

口にするだけでも胸の奥が疼く、あの紅魔館に引き籠もる少女「パチュリー・ノーレッジ」を。

どうして、こんなにも苦しいのか。

どうして、こんなにも儚いのか。

・・・恋とは。

（あいつを、箒に乗せてみたいぜ・・・。）

ふと生まれた、小さな願望。

（そしたら、宴会にも行って、霊夢にもちゃんと紹介して・・・。）
それはいつの間にか、強くなって、

（本当の事言っと、一緒に暮らしたり、実験したり、できたらいいんだがな・・・。）

絶対に叶えてやる、今までだって、努力で何とかしてきたじゃないか。

（きつと、今度だって・・・！）

そうだ。ほかでもない、パチュリーのことだから。

願望は、確信に。計画するのに、時間など要らない。計画など、無い。

行って、言って、来て貰う。

それ以外は一切考えない。考えられない。

覚悟を表すつもりで、小さく呟く。

「明日、返しに行くか」

言葉にした時、それはあまりにもあっけなく、寢室に寂しくこだま
する。

そして付け加えるように、

「・・・朝一番に」

と呟いた。

次の朝、時は辰の二つ（8時半）ほど。

紅魔館の正門。

「よお中国！朝も早くからぐるーなこったぜ！」

「もう・・・日が昇ってそんな経って無いのに迷惑極まりないです
！」

魔理沙は紅魔館の門番「紅^{ほん} 美鈴」と対峙していた。

といつても、魔理沙の前には雑魚も同然であるが。

「悪かったな！今日はパチュリーに本を返しに来たんだぜ！」

「誰も通すな、ってお嬢様に言いつけられているんです！事情なん
て知りません！」

美鈴が虹色に輝く弾幕を無造作のように、しかし完全に計算され
きつた形で放つ。

魔理沙はこれを左右に数センチ断続的に動くこと（ゲームで言うチ
ョン避け）で交わし、自らも星型の弾幕を「本当に」無造作に放つ
た。

弾幕はパワーだぜ、とは本人評。

重なっていた弾幕^{ほし}はほとんどパターンなしに分かれ、時に魔理沙自
身すら予期しなかった方向に曲折し、絶対に美鈴ごとに見極める
事ができないほどに複雑。

「くっ、がっ、ぐうっ！」

「思い知ったか、中国！これが私とお前の実力の差だ！」

「まだまだ・・・彩符『彩雨』！」

美鈴はこれからと言わんばかりに懷からスペルカードを取り出す。
全方向に放たれたかと思われた虹色の弾幕は、ぐるりと方向を変え、

全弾魔理沙に向かって行つた。

「悪いな！今日は、お前にあまり時間を割けないぜ？」

「・・・魔理沙さん、いつもそう言ってますよ？」

「いつもお前に時間を割けないんだぜ。恋符『マスタースパーク』！」

魔理沙はスペルカードを取り出し、両手を右腰に構えた。

「そうはさせません！極光『華厳明星』！」

懷から美鈴がスペルカードを取り出し、右拳を強く握る。

対し、魔理沙は構えた両手を美鈴に向け、広げる。

すると、美鈴の右拳からは虹色の巨大な気功の球体が、魔理沙の両手からは膨大な密度と体積の魔力が放たれた。

「なかなかやるようになったな、中国！でも、まだまだ！」

魔理沙のマスタースパークと、美鈴の華厳明星。二つが衝突すると、マスタースパークが裂け、華厳明星が削れた。

（通さなければ、その内咲夜さんが来てくれるはず・・・！それまでの、時間稼ぎ！）

幾条にも分散した魔力が、弾幕を消滅させ、『彩雨』の内に放たれた分は完全に無効化された。

魔理沙が少し距離をとりつつ、マジックナパームを放つ。

美鈴は動じることなく、華厳明星でマジックナパームを相殺。

その爆発は微々たるもの、のはずだった。

しかし爆発は通常のマジックナパームより数倍の規模の爆発。美鈴は身の危険を感知し、大きく後退した。

「くっ・・・！」

「ふっ、甘かったな中国！」

魔理沙は華厳明星に突撃。

魔力のこもった簪を振り上げ、巨大な虹色の球体を爆砕する。

衝撃に耐えうるよう、防御魔法も自分にかけていたのだろう、無傷でそのまま美鈴に突っ込んだ。

「これで終わりだ！」

「っ……極彩『彩光乱舞』！」

美鈴がスペルカードを取り出すも、間に合わず。

効果の持続していたマスタースパークで零距离射撃。

その衝撃のあまり、マスタースパークの到達した地面はへこみ、黒く焦げたという。

幸い、メイドたちの寵愛を受けている花畑には当たる事が無かったようだ。

その中で、当然美鈴は気絶。

「……中国ー？大丈夫かー？」

魔理沙は美鈴を軽くゆすった。

「……起きない。」

胸倉をつかみ、往復ビンタ。

「……起きない。」

仕方ないので、魔理沙は門番の詰め所まで引きずっていった。

「まあ、ここまでくれば誰かが拾うだろ。咲夜とか」

美鈴が、さも詰め所の扉の前で行き倒れたような格好にして、魔理沙は箒にまたがり、パチュリーの部屋を目指した。

「……？珍しく静かだな。メイドどもも出てこないし、咲夜もいない」

早朝といえど、メイドたちは仕事が山積みのはず。寅の刻に起きていないはずが無い。

ましてや咲夜は生活習慣も完璧なはず。この時間帯に寝ているわけが無いのである。

そのメイドたちがいないとなると、逆に不安になる。

「……嫌な予感がする……」

メイドの妖精がいらないせいで、予定していたより早く、図書館についてしまった。

魔理沙は図書館のドアを軽くノック。

「……だれ？」

「パチュリー、私だ。」

「……今日は……何のようなの？また、本を持ち出しに来たの？」

「いや、違う。今日は……返しに来た」

「……はあ？あなたが、本を、返しに、来た？冗談もほどほどにしてよ」

「冗談じゃないぜ。あと、ちょっと……その……」

「何？」

「一緒に、外に……」

「いけない」

「じゃあさ、夜とかは……」

「出かけたいなら一人で行くわよ。誰があなたなんかと行くと思う？」

「ひどいな。せつかく一緒に実験とかしたかったのに……」

その言葉はなぜか尻すぼみで、パチュリーに届く事は無かった。

「なんか言った？この前も同じような事言った気がするけど」

「何でも、ないぜ……入るぜ？」

魔理沙が、ドアのノブに手をかけた。

ガチャガチャガチャ。開かない。

「鍵が、開いてない？」

「レミイに頼んで、締め切ってもらったの。あなたが入ってこられないように」

「何で、だよ」

「どうしてなのか、私にもわからないの。でも、あなたに会っちゃいけない、気がするの」

若干強い口調。

「直感で、私を締め出すのかよ」

先ほどのパチュリーの口調より、さらに強い、文句を言うような口調。しかし、その口調からは『こんな事は言いたくない』という雰囲気、困気がひしひしと伝わってくるようで。

「悪い？もともとこの図書館は、私の居場所よ。あなたが入ってき

「ていい、訳がない」

だが、やや逆上気味のパチュリーには、その事はわからないまま、ケンカ腰な声量。

「だったら、何だよ！せつかく早起きしてきたのに！」

「それはあなたの勝手でしょ？もう、帰って」

「！・・・わかったよ。・・・また、来る」

「・・・勝手にすれば」

最後にかかったのは、投げやりが少々はいった声。

それを合図に、簾にまたがった魔理沙は、大きく飛び上がった。

T o b e c o n t i n u e d . . .

中編「拒絶」(後書き)

なんか、グダグダになってるかもしれません。
なつてたら、感想にてご一報ください
文章力の限界が着々と見えてまいりました(え

後編「二人の気持ち」（前書き）

遅くなって申し訳ありませんです

あと本編ひとつにやんでれみいの番外編を書いて終わろうかと思っています。

後編「二人の気持ち」

紅魔館大図書館。

「・・・もう、いいの？」

そこにこだまする、屋敷の主人、レミリア・スカーレットの声。

「ええ。・・・メイドたちを廊下から締め出して、悪かったわね」

「別に、あなたの頼みだもの。どうって事ないわ。でも、本当に良かったの？」

「・・・わからない。これで良かったのだろうけれど、何か、胸の奥につかえてるような感じ」

その言葉を聞いたとき、レミリアは悟った。

（なんだ。そんなことだったの。・・・パチエったら、不器用なんだから）

「レミィ？何、ニヤニヤしてるの？」

「え？べつ、別に？なんでもないわよ」

「じゃあ、もう行くわ」

「ええ。じゃあ、またいつか」

レミリアは図書館から出ると、いきなり、ニヤリと何か良からぬ笑みをうかべた。

それを階段から見ていたメイドたちは後々、その現象を「お嬢様の怪奇」と称したらしい。

次の日、『また来る』といった白黒魔女は、白昼堂々マスターズパークをなりふり構わずそこらじゅうに連射しつつ、紅魔館大図書館にやってきた。

「パチユリー！聞こえてるだろ、開けてくれ！」

「なに？あなたとは会わない、って昨日言ったでしょ。」

「気が変わったかな」と思って、来てみたぜ」

「私は一日で考えを変えるほど軽くないから」

「どうして、会ってくれないんだよ。なんかその辺曖昧だと、しつくり来ないんだよ」

「私にもわからないわよ。昨日も言ったでしょ、あなたとは会いたくないの」

その言葉を聞いて、はつとする魔理沙。

「え・・・？本当に、私に会いたくない、のか・・・？」

「冗談じゃ、こんな事は言わないわよ」

「じゃあ・・・私の事・・・嫌いになったのか・・・？」

だんだん、魔理沙の声は不安げになっていく。

「っ！・・・」

「パチュリー」

「・・・」

自分の名を呼ぶ扉の向こうの少女の声に、だんだんと湧き上がるものをパチュリーは感じる。

「なあ、パチュリー！」

「・・・」

煩わしさ、苛立ち、怒り、たまっていくものはどれでもない。それが何かわからず、パチュリーはその気持ちを持て余していた。

「本気で嫌いに・・・なったのか？」

それが唐突に、怒号となって弾けた。それだけの事。

「わからないって、いつてるでしょ?!」

突然の怒号に、魔理沙ははつとする。

それと同時に、次に言葉を放つていいのか躊躇った。

「私だって、どうしてこんな気持ちなのか、わからないのよ!」

パチュリーは叫ぶ。

まるでぶつけるように、しかしまるでそれを受け止めてほしいかのように。

しかし、魔理沙にはそれが伝わらない。

「何で・・・ッ!」

「もう、関わらないで! かまわないで!」

パチュリーは胸の奥でつかえる、まわりつく不愉快な感覚を掃うかのように叫び続けた。

「どうして、私に近づこうとするの?! その度に、私は・・・私は・・・っ!」

「パチュリー、落ち着け!」

「こんなの・・・こんなの、嫌! 私は、私にはレミイ達がいればいいのにつ!」

「パチュリー! もうわけわからなくなってきたぜ!?!」

魔理沙の一言で、正気を取り戻したパチュリー。

「!・・・もう、帰って」

「・・・いわれなくても、そうするつもりだぜ。これ以上お前が取り乱したら、喘息でダウンしかねないからな」

魔理沙は箒に跨り、ふわりと舞い上がった。

魔理沙が去ってから、図書館に子悪魔が現れた。

「パチュリー様、紅茶が入りました」

「ありがと子悪魔、そこにおいというて」

「はい」

子悪魔はテーブルに湯気の立つ紅茶を置き、二歩後ろに下がる。

「・・・どうしたの、子悪魔。もう下がっていいわよ」

「あの・・・パチュリー様。少し、お聞きしたい事が・・・」

「何?」

「その・・・いいんですか? 魔理沙さんの事。たぶん、ものすごく落ち込んでますよ」

「関係ないじゃないの。それに、あいつが泣いてたって、私は知らないわよ」

「ほんととは会いたいんじゃないですか? 魔理沙さんといった時のパチュリー様、とっても生き生きしてましたよ」

「まさか。私が、生き生きしてるって? ありえないわね」

「なんていうか、えっと・・・魔理沙さんとは割と話してますよ? それに、魔理沙さんが帰ってから本を読むスピードが落ちてました」

「後者は何の関係があるの？」

「魔理沙さんという間、体力を多めに消費する、ってことですよ」
ふ、とパチュリーは笑い、子悪魔に呟く。

「そう・・・。」

「あ、パチュリー様、いま笑ったー！」

盆を胸に抱え、パチュリーを指差す子悪魔。少々うれしそうである。

「ちっ、違うわよ。今は・・・ちよつと、頬が緩んだだけ！」

「世の中では『頬が緩む』の意味は『微笑む』ことなんですよ？やっぱり笑ってるー！」

「だーかーらー！違うって！笑ってなんかいいわよ！」

パチュリーは顔を赤らめ、子悪魔に抗議（言い訳？）している。
・なにやら、傍からみると可笑的い。

「そうですか？魔理沙さんというとき、とっても嬉しそうに微笑んで本を呼んでたのに」

「もういいでしょ・・・あ、ちよつとケーキとかクッキーとか、お菓子持ってきて頂戴」

パチュリーは食べもしない茶請けを子悪魔に取ってこさせた。誤魔化しにしては不自然である。

「はゝい。失礼しまゝす。」

が、子悪魔はそれに応じた。ごまかしと知っていても・・・否、だからこそ。

「しばらく帰ってこなくていいわよ」パチュリーが、ポツリとつぶやいた、気がした。

子悪魔が外に出て、扉を閉じた。

と同時に、口を塞がれて両手を後ろに回された。

「っ？！」

>ちよつと、暴れないでよく

耳元で囁かれた声は、幼い少女のもの。

>お嬢・・・さま？<

> ちよつと、部屋に来てほしいんだけど<

> なつ、ななななな？！！<

> 勘違いしないの、頼みたいことがあるだけだから<

音を立てないように静かに羽ばたく吸血鬼の少女は、子悪魔の口を軽く押さえたまま、空いた手で歩くように促す。

子悪魔はその状態や会話の音量から、状態を把握。静かにレミリアの自室へ歩く。

> 見つかるんじゃないわよ<

> は・・・はい、わかりました・・・<

ガチャリ。廊下の横から妖精のメイドが現れる。

「！！」

> くつ！<

レミリアが子悪魔の背中で空いているほうの手を器用に動かし、何かを描く。

おそらく運命操作の術陣だろう。

「あ、そういえば・・・。」

何かを思い出したように、メイドは部屋に戻って行った。

> 危ないわね。・・・これがもし咲夜なら、こうは行かないわよ？<

> はい・・・すみませんお嬢様・・・<

> 謝られても困るんだけど・・・。」<

慎重に歩きつつ、何度か見つかりそうになりつつ、レミリアの運命操作の力で何とか逃げ切った。

子悪魔が静かに扉を開こうとした。

しかし、古びているのか、『ギィ』と言う音が鳴ってしまった。

> ひゃっ・・・<

> これはね、コツがいるのよ。ほら、後ろ向いて<

子悪魔がくるりと後ろを向き、レミリアは子悪魔から離れた。

レミリアが器用に力の向きを変え、静かに扉を開いた。

> わぁ・・・<

思わず感嘆の声をあげる子悪魔。部屋ではなく、レミリアの扉を開く手つきに、である。

>ほら、入ってく

>あ、はいく

レミリアに促されるまま、子悪魔は部屋に入っていった。
ばたん。

レミリアがわずかに開かれていた扉を閉じた。

「・・・つぶつぶ、危なかったわ」

「な、なんで私がみんなから逃げなくちゃいけないんですか？お嬢様・・・」

「ちよつと、今、誰かの顔を見ると笑い出しそうで・・・つくつく・・・」

「・・・（引）」

「ゴホン、私、一応この主人なんだけど」

「も、申し訳ございません！」

「まあ別にいいんだけどね・・・咲夜！」

レミリアがぱんぱんと手を二度たたくと、

「お嬢様、何か御用で・・・って、子悪魔？」

「ど、どうも咲夜さん」

少々驚いている咲夜に子悪魔はぎこちない会釈を返す。

咲夜と子悪魔は、あまり面識がないために他のメイドたちほど親しくは話せないのである。

「咲夜、紅茶を持ってきて頂戴・・・あ、あとパチエにも紅茶と茶請けのお菓子を」

「かしこまりました、お嬢様」

咲夜は見向きもしないレミリアに礼をし、不思議な、鈴の鳴るような音と共に姿を消した。

「・・・咲夜さんは平気なんですね」

「・・・くくくく・・・」

振り返ると、ベッドで腹を抱えて笑いを必死でこらえている屋敷

の主がいた。

「大丈夫ですか、お嬢様?!」

子悪魔がレミリアに駆け寄る。

「くふふふふ……!」

「やっぱり……平気じゃない……」

レミリアの背中をやさしくさすり、落ち着かせる。それから、「・
・・どうして私を連れてきたんですか?」と聞いた。

「だって……パチエったら、あんまりもどかしいから、見てるこ
っちがくすぐったく……!」

「え?どういうことですか?もどかしいって……」

「わからないの?パチエ、あの白黒魔法使いのことが好きなのよ。
それなのに自分で認めようとしなから……っ!」

くくく、と笑いを漏らしつつ、レミリアは言う。

「そうだったんですか?!てっきりパチュリー様は友達として想っ
ていたのかと……」

「気づいてないあなたも相当鈍感ね……ふふふふふ」

一人楽しそうなレミリア。その笑顔は見た目相応ではないものの、
旧知の友を想う反面、意地悪したくなる自然な笑顔。

その顔に安堵を得た子悪魔は、改めて聞きなおす。

「お嬢様。どうして私をここに連れてきたんですか?」

「ん……。ちよつと、パチエの様子を聞きたくて。あの子、図書
館から出てこないでしょ?だから、よく出入りしてるあなたに、最
近のパチエがどんな感じが教えてもらおうかと思ったのよ」

「直接行つて聞けばいいのに」

「もう。本を読んだときのパチエの様子を聞きたいの。私がいる
とパチエ、本を読まなくなっちゃうから」

「へえ……。パチュリー様も、案外友達に対しては真摯なんです
ね」

少し感心する子悪魔。パチュリーは子悪魔を実験がてら契約で呼
び出し数十年が経つが、そのような一面は一切見せようとしなかつ

た。むしろそのような事とはかなり縁遠いと思っていたのだが。

「そんな事はどうでもいいわ。早く教えなさいよ」

「は、はい・・・なんだか最近、本人でも気づいてないみたいですけどよくため息をついているんです。あと、扉をじっと見つめることもあるし・・・それに・・・」

それから子悪魔は小一時間、レミリアに最近のパチュリーの様子を事細かに説明した。

「・・・パチエ・・・相当魔理沙の事で悩んでるみたいね・・・」

「それはそうでしょう・・・魔理沙さんと口げんかになったときに先に怒り出すのはパチュリー様ですし・・・」

「そう・・・あ！」

窓を見たレミリアが、何かを思い出したような声を上げる。

「ど、どうかなさいましたか？」

「もう、夜じゃないの。話し込んでいいわ。ちよつと、食事に行つて来るから、あなたは休んでいいわよ」

「はい。おやすみなさい、お嬢様。行つてらっしゃいませ」

レミリアはその背にある蝙蝠の羽を広げ、昼間は雨戸すら閉め切っている窓をぱつと開け放した。

「あ、そうそう。窓と鍵は、閉めなくていいから。そのままにしておいてね」

「はい・・・お気をつけて」

びゅっ、と風を切り、レミリアは目にも留まらぬ速さで月の明るい夜空へ飛び立った。

子悪魔はそれを見ると、くるりと踵を返してレミリアの部屋を後にした。

次の日、十六夜 咲夜は、傷ひとつどころか少しも息を切らしていない霧雨 魔理沙と遭遇した。

「美鈴・・・まるで役に立ってないわね・・・何をやっているのか

しら？」

「疲れて倒れてるぜ」

「・・・ちよつと、説明しなさい」

「ああ、いいぜ」

正門前にやってきたとき、美鈴はふらふらと辛うじて立っていた。どうやら、美鈴は度重なる魔理沙の来訪で、すっかり疲弊しようだ。「待ってください・・・魔理沙さん・・・ここは、通しませんよ・・・」

「美鈴・・・無理するな、寝てろ。」

そういつて魔理沙は美鈴の腹部を殴る。

「ぐっ・・・」

美鈴が気絶したのを確認すると、肩に抱え箒に跨り、門番詰め所へ。

そして美鈴を詰め所で休憩していた非番の門番に預け、本館に飛び、今に至る。

「しばらく休暇を与えなくちゃいけなかったかしら？」

「そうだな、少なくとも一週間は必要だぜ」

「で？図書館の前まで案内したほうがいいのかしら？」

「そうだな、お願いするぜ」

咲夜は、魔理沙を先導して紅魔館大図書館へ案内した。

・・・嫌々に。面倒臭そうに、しかし決して面へ出さないようにしつつ。

大図書館の十メートルほど前。

「じゃあ、私はこれで」

咲夜が踵を返し、魔理沙とすれ違ふ。

「おう、ありがとな、咲夜」

魔理沙は振り向き、手を軽く振る。

「お礼を言われるようなことはしてないけど・・・」

「まあ、一応ついてきてくれたんだ。礼は言っとかないとな」

「『礼には礼を』？さすが東洋人は、礼儀に厳しいわね」

「お前も東洋人だろ。それに私は、礼儀を守るのが苦手な方だぜ」

「・・・」

咲夜がなにやら失言した感を醸し出していると、

『咲夜ー！どこー？お茶を入れてほしいんだけどー！』

屋敷の主人の呼び声が紅魔館中に響いた。おそらく音声透過の魔術だろう。

レミリアは身体能力、魔力だけでなく、魔法を扱うテクニクもパチュリーや魔理沙に引けをとらない一級品である。音声透過など本を少し眺めたただけでほぼ完璧にやってのける。

「お嬢様がお呼びだから、また今度」

そういつて咲夜は、数枚のトランプ（J・3・D5・K・A）すべてジャックを残して消えた。

パチュリーのいる図書館の目の前で、魔理沙は一枚の紙を取り出す。

「すまん、パチュリー」

表裏黒地に金の文字や魔法陣。陣の中央に青い光が宿っている。

「恋符『マスタースパーク』」

（こうしなきや・・・こうするしか、お前を、出してやれない・・・！）

扉に手をかざす。

その手の平に次第に碧い魔力が集まり、その輝きを増していく。

「っだあああ！」

輝きの満ちた碧い光が、爆発的な破壊力を持って、図書館の扉に叩きつけられる。

三十秒ほどの後、光が収まると、白い埃や土煙とともに、蒼碧の花が舞う。

「・・・」

『金木符「エレメンタルハーベスター」』

直後、銀色に輝く齒車が現れ、急激に回転しながら魔理沙に迫ってきた。

「なっ?!」

魔理沙は驚異的な反応速度でこれをかわし、齒車をマジックミサイルで破壊した。

『なにやってんの。人の部屋の扉を壊そうなんて』

聞こえるパチュリーの声は、扉に輝く魔法陣から。

「っ……!」

『こんなこと、まさかやるなんて思わなかったけど……念のために強化しておいてよかったわ』

「まさか……見通して……」

『そこまで、私を連れ出したいの?』

「そうじゃなかったら、こんなことしないぜ」

『そう……あなたには一度、しっかり言っておかなくちゃね』

「何だ?」

『あなたとは、会わない。もう、顔も見たくない』

「え……?」

『帰って。もうこないで。次来ても、あなたとは一言も話さないから』

「それって……」

『ええ。あなたのことなんて、なんとも思っていない。むしろ嫌い』

「っ……」

言葉もなく、ただパチュリーの展開した魔法陣から発せられる声に立ち尽くす魔理沙。

嫌い。出て行って。もう来ないで。顔も見たくない。

(嫌……もう……聞きたくない……やだ……)

「帰って、あなたと話すことなんて何もないから」

とどめの一撃。魔理沙はその一言ですべての感情が消えた気がした。

「……わかった……帰る……」

『じゃあね』

魔理沙は涙すらでないと叫んだ。呆然とした表情で簾に乗り、ふわりと空に舞い上がった。

パチュリーは扉の向こう、魔法での会話を遮断して、本に向き直った。

「・・・あれで、やっと、開放される。あれで、よかったのよ・・・」

「そう呟くと、頬に冷たい感触が伝い、それが落ちて本を濡らす。」

「・・・？」

頬を伝うその感触の跡は次第に増え、本を濡らす液体はしみを広げていく。

パチュリーは目をこすり、袖についた液体を見た。

その間にも、頬にはいくつも液体の通った跡が増す。

「私・・・なんで・・・泣いているの・・・？」

厄介払いを済ませたはずなのに。

せいせいしたはずなのに。

「どうして・・・こんなに・・・痛い・・・？」

本に零れた雫は、少しずつ頁に染み込んでいった・・・。

後編「二人の気持ち」（後書き）

前回とか前々回に比べて長文になってすいません
たぶん後の二編もそうなると思いますがお付き合いいただけると嬉しい
です。家の中を飛び回って跳ねまわります。
小説のスピードにも反映されます。

完結篇「彼女の結論」(前書き)

このお話だけ、以上に長いです。
小一時間つぶれる覚悟でお読み下さい。

完結篇「彼女の結論」

「あ、ちよつとそこの白黒！」

「・・・なんだよ、レプリカ」

「・・・霊夢め・・・嫌がらせのつもり・・・？魔理沙にまでいわせるなんて・・・」

紅魔館大図書館の前をあとにした魔理沙は、出て行こうとして扉の前でレプリカ・・・じゃなかったレミリアにつかまった。

「べ、別に嫌がらせってわけじゃないんだが・・・」

「霊夢じゃなかったら、何？まさか、あなた本人の意思？」

「レプリカが本名だろ」

「パチエのことで気が立つてるの？よければ付き合うけど？」

なにかを察したのか、レミリアは地下のハウスバーへ魔理沙を誘った。

「・・・いつとくけど、私は40度未満のは飲まないぜ？」

「体壊すわよ」

「壊してないから大丈夫だぜ」

「お酒が絡むと、やけに機嫌がよくなるのね」

「アルコールは人の気分をよくするぜ」

「まだ飲んでないのに・・・？まあいいわ、咲夜！」

ぱんぱん、と手を二回たたくと、咲夜が現れた。

「何か御用で・・・あ、魔理沙」

「よう、咲夜」

魔理沙が、ひらひらと手を振る。

「あんたの出した歯車の処理、どれだけかかったと思ってんの？おかげでこっちは無駄な労力使っちゃったじゃない」

「あれ、パチユリーが出したんだぜ。私があんな高純度・高密度な

物質をフイーリングで生成できるとでも思ったか？」

「咲夜。無駄話もいいけど、地下のバーを開けて頂戴」

「はい、かしこまりましたお嬢様」

「つくー！もつと持って来い！」

魔理沙は、紅魔館地下のバーでカウンターにいる妖精にウィスキーの追加注文をしていた。

「ほんと、よく飲むわね・・・」

レミリアは、呆れた様子で薄めのブランデーをちびちびと口にする。

「飲めるところで、飲んどかないとな。後々飲めなくなったとき、後悔する」

「ふふつ、面白い発想ね。私たち吸血鬼にとって、お酒なんて・・・ただの重度の麻薬でしかないのに」

「麻薬とは、酷い言い様だな。アルコールはそれほど重度の依存は引き起こさないぜ」

するとレミリアは、ふと上を向き、

「私は純潔だから多量の人の血を吸ってきた。その血でアルコールの効果は薄まるけど、そうでない血を吸われて吸血鬼になった奴らは、人としての分子を全て吸血鬼としてのそれに変換され、なおかつ人の血を吸わないから、吸血鬼の『依存・中毒が強くなる』特性に引つかかって重度の依存症を引き起こすの」

唐突に長い解説を呟いた。

「なんか小難しいな・・・こんど吸血鬼の研究でもしてみるか」

「そう小難しくもないわよ。人の血を吸わなきゃ吸血鬼はお酒や煙草を嗜めない、ってだけ」

「やっぱり研究するぜ。レミリア、お前が材料だな」

「お断りしておくわ・・・ところで、パチエのことだけど」

レミリアが手に持っていたグラスを、カウンターにことん、と置

く。

「・・・あんまり、話したくはないんだが・・・」

「そうでしょうね。じゃあ、こういうのはどう？」話してくれなきや運命操作でバラバラ死体に・・・」

「・・・仕方ない、何でも聞いてくれ」

魔理沙は、グラスを自分の目の前にもって行き、ぼんやりと眺めながらからからと音を立たせる。

「それでいいのよ。まず、貴女パチエのこと好きでしょ」

「・・・単刀直入すぎるのも考え物だな」

「早く答えないと天井からランプが落ちてくるわよ」

「・・・ああ、確かに私はパチユリーのこと・・・」

グラスを置き、魔理沙は俯いた。酒が入ったからか、それ以外の理由か、顔が赤い。

「そう。また、単刀直入に言うわよ」

「ああ・・・」

「私は、貴女がどれだけ苦しんでるか、知らない」

「わかってるぜ」

「でも、」

レミリアが魔理沙に向き直る。

「貴女の痛みがわからなくても、話くらいは、聞けるの。どう？私に、今だけでいい。その痛みを、打ち明けてみない？」

まっとうな吐かせ文句。落ち込んでいる相手の気持ちを引き出すのに、これほど利くものはないだろう。

「・・・いい、のか？話題が、重いぞ・・・？」

「なにいつてんの、洋酒を交わした仲じゃない。何でも話してよ」

レミリアには、人から話を聞き出す天賦の才でもあるのだろうか。運命操作を使わず、何気なく人に打ち明けさせる何かを、レミリアは持っている。

魔理沙はその才能というかなんというかにひっかかって、いろいろ打ち明けた。

「でな・・・パチュリーは、私のことを・・・嫌い・・・て・・・」
「そう。パチエも、なかなかきついこといわね。ねえ、もし、パチエが振り向いたらどうするつもりだったの？」

「そ、それは・・・」

「毎日、図書館できやつきやうふふとか？」

「あー・・・それもいいな・・・」

「で、どうなのよ本当のところ」

「図書館ごと、ごっそり私の家に・・・」

「持って帰る気だった？！」

大それた計画に、レミリアは驚愕する。

「ああ、そのつもりだったんだが・・・」

「な・・・なんて恐ろしい娘・・・」

「大きい懐があるといつてもraithたいぜ」

「大きいのは家じゃなくって？」

「家はまあまあ大きいが・・・地下に、図書館とほぼ同じ、いやそれ以上の空間がある。そこに、私の魔法で本を全部移すつもりだったんだ」

「それって・・・もしかして・・・」

「パチュリーに、私の家へ引っ越してもらおうかと・・・」

「そ・・・そう・・・」

「諦めたほうが・・・いいかな？やっぱり」

「・・・わからないわね・・・パチエの気持ちも、貴女の望みも」

（紅魔館でならいいのに・・・パチエ・・・）

かつかつかつ。

階段を下りてくる、靴の音が聞こえてきた。やけに早足である。

（誰よ、こんな時に?!）

木を装飾して作られた真っ赤な扉からは、同じく赤い髪の子悪魔。
「つはあ、はあっ・・・魔理沙さん！お嬢様！」

後ろに魔法でぶかぶかと水晶球が浮いている。

「っは、ちよつと、これ、見て下さいっ！」

「子悪魔、少し落ち着きなさい。どうしたっていつの？」

「だ、大丈夫か・・・？」

レミリアが妖精に水を持ってこさせ、子悪魔に手渡す。

子悪魔はそれを、一気に飲み干した。

「んっ、んっ、んく・・・っはー！」

かん、という軽快なグラスの音が、バーの中に響く。

「落ち着いた？」

「はい、何とか・・・って、それどころじゃ・・・！」

（子悪魔が、あの、ちよつとやそつとじゃ揺るがない子悪魔が、慌てている？）

子悪魔が慌てふためくもの　唯一、思い当たる節があった。

「パチュリーに、何かあったんだな？！」

「は、はい！そうなんです！」

（何なの・・・この、胸騒ぎは・・・）

レミリアは、なにやらいやな予感を感じ取り、顔を少し顰^{しか}めていた。

「・・・これを見てください！」

子悪魔がカウンターに水晶玉を乗せ、何か呪文を呟く。

「あら、過去の映像再生と現在の映像再生の重複詠唱？また小器用なことするわね」

「ええ？私にはなにが何だか・・・？」

「気にしないでください。たいした技術じゃないので」

水晶玉に、何かが写りこんだ。

「まず、これが二刻前。魔理沙さんが、図書館から去った少し後の映像です。」

『あ・・・れ？私、どうして泣いてるの・・・？』

水晶玉は、パチュリーの左後ろ上、扉の上の部分からの視点で、パチュリーを見下ろしていた。

パチュリーは、袖で目をこすっているように見える。

「このときから、パチュリー様の様子が少し、おかしくなりました。そしてこれが、一刻前の映像」

子悪魔がそう言くと、一瞬映像に暗転が入り、次の映像が現れた。『パチュリー様、どうかなさったのですか？本をお読みにならないなんて』

『放っておいて。さもないとアグニシャインするわよ』

椅子に座ってぼうつとしていたパチュリーは、紅茶を持って来たらしい子悪魔を、悪態で追い返した。

「確かに・・・こんなのいつものパチエじゃない・・・」

「こんなに短気じゃないよな・・・パチュリー」

「はい。これが、現在の映像なんですけど・・・」

今度は、少々暗転時間が長かった。映るのも時間がかかった。

「すいません。ちよつと映像の受信がパチュリー様の魔法の所為で遅いみたいですね」

映像に現れたパチュリーは、身体を机に突っ伏してブツブツ呟いていた。

『あれで・・・よかったのかしら・・・どうして・・・魔理沙・・・』

「これが・・・パチュリーかよ・・・?!」

「この娘、パチュリーじゃないんじゃないの?!そっくりな誰かとか・・・!」

魔理沙は想い人として、レミリアは親友として、それぞれ違った心境で、しかしどちらも本気でパチュリーを不安に思っていた。

パチュリーの今の状態に、前の『本が生きがい』のパチュリーの姿はなく。

今はただ、なにやらよく分らない事を呟くだけになってしまっている。

そんな状態でも、魔理沙は言葉を聞き逃さなかった。

「い、今、『魔理沙』・・・って!私の名前を言ったぜ!」

「へっ?私には聞こえなかったけど・・・」

「ほら、よく聞いてみるよ！」

『ねえ・・・レミィ・・・これで・・・本当にこれで・・・私は・・・』

「あら。言ったのは私の名前だったようね」

『魔理沙・・・どうして・・・あんなの事なんか・・・気に・・・』

「私も呼ばれてるぜ？しかも、望みありな雰囲気だ」

「望み、ですか。あるものにも、パチュリー様は魔理沙さんのこと・・・」

（あ、それを言ったら、パチエが　　）

小悪魔が言いかけたとき、

『・・・そこ。何か覗いてるでしょ。この雑さは・・・子悪魔ね。覚悟なさい、後でロイヤルフレアにかけてあげる』

パチュリーが水晶玉の方向に目を向けて呟く。そして、水晶玉にひびが入り、真つ二つになった。

「・・・しばらく、ここに匿って下さいませんか・・・」

バーテンダーをしていた妖精に、なにやら頼み込んでいるようである子悪魔。

「・・・かまいませんが・・・私、普段ここには・・・」

「そうでしたか・・・じゃあ、フランドール様のお部屋に匿って貰います」

「死ぬわよ、確実に」

「・・・」

「謝っ・・・ても、許してはくれないか」

「は、はは・・・何とか、逃げ切ります。それより、魔理沙さん。これで、諦めなくて、すんだでしょう？」

「ああ・・・でも、ちよつと、すぐにでも行くと・・・また、傷つきそうで、怖いんだ・・・」

もつすつかり薄くなってしまったブランデーを、一気に飲み干す魔理沙。

そこにあつたのは、決意と覚悟と、恐怖と不安。そこから、恐怖と不安を消し去るかのよう一声、

「っしゃあ！持ってつてやろうじゃないか、パチュリー！」と叫ぶ。

「うーるーさーいー。ぶっ飛ばすわよ」

「悪い悪い。ちよつと、気合を入れなおそうかと、な。子悪魔、レミリア、いろいろありがとな」

につ、と笑って見せる魔理沙。そこにはもう、迷いはなかった。目的のために、全てを出し切る覚悟が、できていた。・・・ただ、まだ、パチュリーに受け入れてもらえないかもしれない、という不安があつたのだが。

「いえ、私なんて、ただ魔理沙さんに現状を伝えただけで、何にも・・・」

「そんなこと、ないぜ。今の私に、あの事実はなによりも喜ばしいぜ」

子悪魔の肩をポンと叩き、立ち去ろうとする魔理沙。

「気をつけて。私は、もうちよつとここで飲んでるわ」

レミリアは、また、ちびちびとウィスキーを口に運び始めた。

魔理沙が、扉から出て行ったのを合図に、レミリアがぐつと瓶ごとウィスキーを煽る。

（これは・・・何とかしなくちゃね・・・）

そのときのレミリアの目は、人の世界にいたころの『紅い悪魔』のそれだった。

バーテンダーをしていた妖精は、その目に怯えて、拭いていたグラスを潰してしまったそうな。

「さあ、子悪魔？私を盗撮した罰は、重いわよ？」

「な、なにをする気ですか・・・」

子悪魔がパチュリーに捕まり、空中に十字架で磔はりつけにされている。

パチュリーの口からつむがれる言葉は、まるで泣いた後のように震え、落ち着きのない、静かな声量すらも怒号のような迫力を持っている。

子悪魔はその恐ろしさゆえに顔を蒼白に、流す涙もないほど恐怖に歪んでいる。

「まず、これを飲みなさい」

宙にふわりと浮いて、子悪魔の目の前で薄い赤の液体の入った小瓶を取り出し、軽く振って見せた。

「これはね、レミイたち吸血鬼が自己回復力を高めるために身体に作られる物質なの。これ、意外とつくりが単純だね。私なら、一か月分、この量に濃縮状態で作り出すなんてわけなかったのよ」

言葉を吐くにつれて口調が滑らかになっていくパチュリー。

子悪魔の胸の前に何か指で魔法陣を描いた。

すると、子悪魔の意思に関係なく、口が開いていく。

その口に赤い液体を流し込みながら、パチュリーは言葉を続ける。
「契約によって呼び出されたあなたの身体を操るなんて、召喚術の基本。この身体は今、あなたの物ではないわ」

そう言っただけで地面に降りると、パチュリーは一枚、スペルカードをテーブルから取り上げた。

「日符『ロイヤルフレア』」

カードを中心に、夏の陽光を何十倍にもしたほど、強い光と熱が、子悪魔を襲う。

「っあああああああ！」

苦痛と眩しさに目を瞑り、叫び声をあげる子悪魔。

光が引くと、子悪魔は服は当然のこと、その身体もところどころ焦げ付いていた。

「痛い？ 苦しい？ 今、そんなことを言っているようじゃ、この先は到底耐えられないわね」

「・・・」

もはや子悪魔に言葉を出す気力はない。闇の象徴である悪魔に、太

陽の光を浴びせたのだから、それも当然と言える。

「そろそろね・・・5，4，3，2，1、」

パチュリーが懐中時計を眺めながら呟いた。

「・・・っ?!」

子悪魔は、身体の奥から何か熱いものが湧き出る感覚に襲われた。そしてその感覚が全身を支配したと思うと、体中の苦痛は消えていた。

首を動かして、自分の身体を見回す子悪魔。

その身体は、服すらも傷ひとつなく、治っていた。

「成功ね。あ、子悪魔。ひとつ言っておくけどその薬、効果開始が四十秒、治癒に5秒、次に十五秒で・・・」

パチュリーが言い終わる前に、子悪魔の身体に変化が現れた。受けた傷の、ほんの僅かな一部分が、元に戻ったのだ。

「分った？傷の一割が、蓄積されるの。これを何日続けたら死ぬかしらね。・・・少しずつ、死が近づいてくる感覚に恐怖しなさい。

それが、貴女への罰・・・」

「そん、な・・・」

「火水木金土符「賢者の石」

恐怖と絶望、そしてパチュリーの狂気に、子悪魔は意識が遠退いて行った。

(これで、パチュリー様の気が治まるのなら

)

それから数日の間、魔理沙は神社の巫女やら魔界の神やらその娘と延々弾幕ごっこを重ね、鍛錬に励んでいた。纏わりつく不安感を振り払うのに、ちょうどよかったから。

もちろん、レミリアが邪魔をしてこないとも言切れない。それに備え、魔法の解除策の研究も怠っていない。

家にある書物で、複雑な魔法を基本的に単純な魔法に作り変え、一つ一つ解除する方法を暗記する。レミリアの魔法応用も、こうすれ

ば怖くないと考えたらしい。

「ねえ、魔理沙。どうして？最近、ありえない上達の速度じゃないの。私じゃ、役不足になってきたわ」

博麗神社の巫女、博麗 霊夢は魔理沙との弾幕ごっこを終え、神社の縁側で魔理沙と緑茶をすすっていた。

「やつぱり、あの紫もやし関わってる・・・わけ？」

紫もやしとは、パチュリーのこと。

霊夢は、少し寂しげな表情をする。

「?・・・あ、ああ。パチュリーを持って帰るために、少しでも、実力をつけておかないとな」

「そうね・・・魔理沙」

「なんだ？」

「・・・もし、私が、ここで、あんたの事・・・好きって言ったら、どうする？」

空を眺めていた二人を包んでいた空気を先に切ったのは、霊夢。

「どうもしないぜ」

迷いなく、魔理沙は答えた。

「少しも、心は揺らいだりしない？」

「ああ。私は、パチュリーがいるからな・・・なんで、こんな事訊くんだ？」

魔理沙は、空を眺めるのをやめ、霊夢のほうを向く。

「まあ、あんたに揺さぶりをかけて試したとでも思ってた頂戴」

霊夢のほうは、空を眺めたまま、いつものように表情なく呟いた。

「そうか。心配は無用だぜ・・・っと、こんな時間じゃないか」

振り返り、からくり時計を見る魔理沙。

ゼンマイ式なのだが、定期的に術で巻いているらしい。

それはすでに、夕の寅（4時程度）を差していた。

「そろそろ、帰るぜ」

「ええ。気をつけてね」

霊夢は、上を向いたまま、緑茶をすすする。

「ああ。またな・・・どうして、上向いたままなんだ？」

「まあ・・・放っておいて」

魔理沙が箒に飛び乗り、地面を蹴り、空高く飛び上がった。

まるでそれを合図にしたように、霊夢は俯いた。

「馬鹿。察しなさいよ・・・下向いたら、泣きなくなるでしょ・・・」

「

再び口にした緑茶の味は、頬を伝う雫によって、渋さが少し増しているように思えた。

魔理沙が紅魔館にこなくなつて、数日。

「これで・・・完璧ね。」

屋敷の主人は、遠隔操作で図書館の魔法陣をいじっていた。

外部からの進入を許さず、かつ中からの脱出も不可。破壊や解除など、もつてのほか。

レミリアは、己の知る防御、封印系魔法陣の全てを叩きこんだ。

魔理沙の放つ恋符「マスタースパーク」や魔砲「ファイナルスパーク」では到底破壊は無理だろう。

「もう、魔理沙に、パチュリーを持っていかれる心配はないわよね・・・？」

本人は自室に籠り、ベッドに寝そべっている。

「お嬢様、全員に『Lunatic』宣言、通知完了しました」

「ご苦勞様。警備は完璧・・・全力を出し切って頂戴」

「かしこまりました」

『Lunatic』。

この幻想郷では、弾幕ごっこ中、禁忌とされている宣言。

その宣言は、相手を幻想郷の管理者の一人である霊夢が『常軌を逸している』と判断した場合、もしくは弾幕ごっこにおける両者の合意がなければ許されない宣言なのである。

めつたに使われない故に、使えば通常の全力を大きく上回る力を得られる。

それを吸血鬼が人間に、合意もなしに宣言したとなると、それ相應の罰が下る。

境界を通しての追放か、博麗の巫女からのきついお仕置き。

・・・大抵は後者だが。

「禁忌つて分つてても・・・やらなきゃいけないのよ、パチエのために・・・」

拳を握りこみ、レミリアは再び、妖精に指示を出す。

「後、ルーミアとチルノと美鈴には、特殊な指令を出して置くわ。伝えて頂戴」

「どのような・・・？」

「まず、ここにくるには、神社裏しかないわよね？その後は

」

「ほら、これ。念のために」

「おう、ありがとな霊夢」

エプロンドレスの下にスペルカードを普段より多めに、魔理沙は忍ばせる。

パチュリーを『持つて帰る』為に、家にあるスペルカードの半分は入れてきた、と称している。

体力を案じた霊夢は、自分のために香霖堂から買っておいた体力増強の瓶薬を魔理沙に手渡した。

「あんた、目的のほかは何も見えなくなる事がよくあるから、うつかり咲夜につかまったりするんじゃないわよ」

「そんな事しないぜ。ちゃんと目の前に立ちはだかった敵は潰すぜ」

「はあ・・・なおさら心配ね・・・潰される敵が」

「半殺しにはするぜ」

「なおさら心配よ・・・ちゃんと殺しなさい」

「・・・ところで」

「何よ」

「何で、私の為にここまでしてくれるんだ？お前は、無益な事はし

ないようなやつだっただろ？」

「……馬鹿。早く行きなさい……。あの引き篋もりが待ってるかもよ」

「……おう！」

魔理沙は箒に飛び乗り、強く地面を蹴り上げ、飛翔する。

その速さは、後ろから星型弾幕でも噴出してきそうな勢い。

「……私も、準備しなくちゃ……。あの馬鹿の手助け、後ひとつ残ってるしね」

パチュリーを持っていく日が、この日になった理由。

それは、一通の通信の魔法陣が書かれた手紙。

発動すると、子悪魔がそれに応じた。

「……魔、理沙……。さん……？」

「子悪魔か？どうした、急ぎの用でもあったのか？」

「パチュリー様のいない、今のうちに全て話しておきます……。パチュリー様は、図書館に魔法で閉じ込められています」

やったのはレミリアかな。

そう、魔理沙は想像する。あいつなら、やりかねない。きっと、連れ出すと聞いて危機感を覚えたのだろう。

「あと、紅魔館の警備が利いている場所……。神社裏から、湖を中心とした外延。その全域に『Lunatic』宣言が出されています」

「『Lunatic』……。私のためだけに……。？ほぼ、禁忌じゃないか……。！」

「ええ。お嬢様は、それを承知で……」

「言いたい事は、それだけだな？！」

「はい……。っ！パチュリー様が来ました。じゃあっ」

言いたい事だけを言っ、子悪魔は通信を遮断した。

同時に、書かれていた魔法陣が魔法切断の負荷に耐え切れず、『ぽっ』と青い炎をともして消えた。

「何で・・・パチュリーがいちゃ、いけないんだ・・・？」

しばらく、子悪魔の残した情報を整理するためか、魔理沙はその場に静止した。

まず、パチュリーはレミリアによって図書館から出られない。

その上に、レミリアは霊夢からの処罰を覚悟で『Lunatic』を宣言させている。

おそらく、後一つくらいは秘策が残されているのだろう。

「・・・パチュリーが、やばい・・・？」

正確に言うと、パチュリーをさっくり持つていく計画がやばい。

どうこう考えをまわす暇もなく、魔理沙は机のバッグと引き出しの中のスペルカードをありったけ引っつかんで、箒に跨り、手助けを請いに神社へ飛び、今に至る。

神社裏の森。

魔理沙が宵闇の妖怪を気にとめずに飛び続ける。

「ルーミア様！」

「ん・・・？なに」

周りにうつすら暗闇を纏った、金髪黒衣の妖怪少女『ルーミア』は、部下の妖怪の呼び声に、木にもたれていた身体を起こす。

「霧雨 魔理沙に、動きが！」

「・・・そーなのか・・・行かなきゃなあ。ありがとね」

ルーミアはふわりと低く空を飛び、妖怪に魔理沙の足止めを命じた。

氷の湖。

魔理沙は箒に全魔力を傾けて、妖精を身に纏う風圧で寄せ付けずに進んだ。

湖の端のほうで見ていた、氷の妖精『チルノ』は魔理沙を眺めていた。

「ち、チルノちゃん！行かなくていいの？！」

「えー？なんで？」

隣で魔理沙を見るなり取り乱しているのはこの湖の下っ端妖精達のまとめ役である大妖精。チルノの親友でもある。

「お嬢様から、白黒を見たら屋敷の門に行けって言われたじゃない！」

「ああ。そうだった・・・じゃあ、いつてくるね」

チルノは、立ち上がり、羽に魔力を込めた。

大妖精に、無理しない程度に止めて置くよう、頼んで。

「え？！魔理沙さん、こっちに向かつてる？！」

「急いで行きなさい中国！早く！私は、館内の警備を固めておくから！」

「は、はい！」

紅魔館門番詰所は、メイド長の持ってきた知らせによって、あわただしくなっていた。

霧雨 魔理沙の来襲。それに伴う侵攻の阻止。

それが、休息を終えて、完全復活を遂げた紅 美鈴の久々の仕事だった。

「スペルカード装填・・・よし！『L u n a t i c』補助マニユアル確認！行つてきます！」

妖怪たちや大妖精の健闘も空しく、魔理沙はほぼ無傷で紅魔館正門付近に現れた。

「じゃまだ、どけ！スパークされたいのか！」

「たとえされたとしても、ここから先に行かせないのが、私たちの仕事！」

魔理沙は、立ち塞がる妖精や妖怪をイリジョンレーザーやマジックミサイルで応戦し、襲い来る弾幕を寸分の狂いもなくかわす。

その先に、正門が見えたと思いきや、無数のレーザー、氷色と虹色の粒球が急速に魔理沙に降り注いだ。

「つく！」

これを霊夢が「試作だけど・・・」とよこしたカード『霊撃』で消滅させる。

「お前らがいないのを不自然に思うべきだったぜ・・・」

現れたのは、

「此処は通さないからね」宵闇の妖怪『ルーミア』と、

「かえるみたいに氷づけにしてやる！」氷の妖精『チルノ』と、

「お嬢様のご命令なので、止めさせていただきます」華人小娘『紅美鈴』。

魔理沙がスペルカードを取り出し、箒を再び進める。

「吹き飛ばすだけ、焼き殺したりしないぜ」

「『紅符』『紅魔の防壁』！」「」

ルーミアが黄色い弾幕で壁を作り、

チルノがその隙間を縫って分裂氷弾を放ち、

美鈴が壁の外側全方位から魔理沙に集中した弾幕を放つ。

「っ！」

魔理沙は箒から降りずに幾らか後退、スペルカード詠唱の体制にはいる。

「詠唱は・・・させない！」

ルーミアの黄色い壁が迫ってくる。

その陰から、美鈴が現れ弾幕の乗った蹴りを放つ。

魔理沙は咄嗟の感覚でこれを幾らかかわし、幾らか傷と呼べない程度の被弾を受ける。

そして全く気にする様子もなく、スペルを唱えた。

「魔符・・・『ミルクィウェイ』！」

魔理沙が唱えるや否や、その手から無数の巨大な星型弾幕が怒涛の勢いを持って『紅魔の防壁』を崩す。

「え・・・?!」

「まだ調整中だが・・・これでも十分すぎるほどだな。完成は冬頃

になるか」

美鈴は流れ弾、チルノとルーミアはともに正面から星型弾幕を受けた。

吹き飛ばされた美鈴は真紅の薔薇園の壁にぶつかって気絶。チルノとルーミアはいうまでもなく地面に突っ伏している。

「く、こんなところで無駄に時間を・・・！」

ちっ、と舌打ちしつつ、図書館を目指す。

閉じられた門を、無理やり恋符「ノンディレクショナルレーザー」で破砕。

ついでに、周りにいる妖精も撃破する。

「っし！」

小さくガッツポーズ。開発中だったが、満足な結果がえられたようだ。

「油断は、大敵よっ！」

「な?!」

背後から飛来する無数のナイフを、身体をひねってかわす。

「人の恋路を邪魔する気はないけど・・・」

「じゃあするなよ」

「お嬢様の命令なの・・・パチエを持ってかせないで、って!」後ろにいた咲夜が、もう一度ナイフを放つ。

魔理沙は難なくかわし、マジックミサイルを放出。

ぐにやりと方向を変えたマジックミサイルは、魔理沙のかわしたナイフたちを撃ち落とす。

咲夜が時間を止めようと「咲夜の世界」を取り出した。

「ちい！」

魔理沙がイリユージョンレーザーを放ち、咲夜の詠唱を阻止。

「『咲夜の・・・』くっ！」

「もらった！」

バッグから恋符「マスタースパーク」を取り出し、構える。

「恋符『マスタースパーク……』」

「させないわよ」

背中にあたったのは、真紅の槍。

光が魔理沙を貫通し、通った後が切り傷や火傷で覆われている。

「が、っ……」

「お嬢様！」

「なに、人の親友をとろうとしてんの？」

「デーモンロードウォーク」で魔理沙に近づき、爪で魔理沙の後ろ全身に切り傷を負わせる。

少し浮き上がった魔理沙に夜符「デーモンキングクレイドル」を浴びせ、さらに浮かせる。

「咲夜、今よ！」

「はっ！」

「咲夜の世界」発動、魔理沙の四方八方にナイフが放たれる。

時間が動き出し、魔理沙はいくつかかわすものの、腕に脇腹に足に頭に、ナイフは傷を負わせていく。

「はあっ！」

魔理沙はマスタースパークを無詠唱（禁則）で放ち、咲夜とレミリアから間合いを作る。

「くっ……！」

レミリアと咲夜はかすって多少のダメージを受けはしたが、これをおかわす。

「幻符『殺人ドール』」

咲夜はスペルを放ち、レミリアが動きを停止させる蝙蝠型の魔力を放つ。

「っど?!」

弾幕格闘における「飛翔」によるグレイズを喰ったが、その途切れ目にちょうど蝙蝠が当たり、隙が出来た。

咲夜によって放たれたナイフの波は、魔理沙の全身を切り刻む。倒れた魔理沙に、追撃をかけようとレミリアが魔理沙の真上に浮く。

「紅符『不夜城レッド』！」

地面から真紅の魔力の塊が噴き出し、魔理沙の身を切りつけ、焦がしていく。

もはや呻きの一つも出ない魔理沙。その身は血に塗れ、起こり得る全ての惨状をその身に受けたような状態。

「・・・勝った・・・勝ったわよ！魔理沙に！パチエは、守ったわ！これで、これでパチエは紅魔館に・・・！　っははははははは！」

歡喜か狂喜か、レミリアは狂ったように叫び、笑いだす。

それを咲夜は目にもくれずに、魔理沙へ歩み寄る。

「とどめは、さしておかなくては・・・」

咲夜はただ忠実に、主の言いつけを守り、『パチユリーを奪い取る要素を消し去る』ことを優先した。

故にナイフを構えて、魔理沙の胸に突き立てようとした。

「さようなら、霧雨　魔理沙」

ナイフを逆手に持ち、魔理沙へと振りかざす。

直後、

「魔符『アーティフルサクリファイス』！」

「神業『八方龍殺陣』！」

爆発する人形と夕日色の八角の壁が、咲夜の力で広く見える紅魔館の廊下を埋め尽くす。

「なっ?!」

「呪符『ストロールドールカミカゼ』！」

「宝符『躍る陰陽玉!』！」

白く光る弾幕の軌跡を残しつつ直進する人形と、青く透明な跳ねる陰陽玉が、人形の爆風と八方龍殺陣の壁から飛び出してきた。

「くっ・・・!!」

「な、何?!」

反応する暇もなく、ものすごい数の人形に弾かれ、たった四つだが異常に殺傷力の強い陰陽玉に撥ねられ、咲夜とレミリアが魔理沙付近から弾き出された。

「レミリアあ？『Lunatic』に無詠唱発動連呼だなんて、ルール違反もいいところじゃないの」

現れたのは、博麗の巫女・・・博麗 霊夢。

「どうも、始めまして紅魔館の皆様。出会い頭悪いけど、私達とつても気分が悪いの。ちよっと弾幕ごっこにでも付き合ってくれない？」

そして、魔神の子・・・アリス・マーガトロイド。

「・・・霊夢・・・！・・・だれ・・・？」

先に口火を切ったのは、レミリア。

「今、それどころじゃないの。魔理沙に、とどめを刺さなくちゃいけないから」

あとに続いて、冷静に咲夜が言い放つ。

「だから気分が悪いのよ？私達のお友達をボッコボコにするならまだしも、ナイフで殺そうだなんて・・・」

「許せない、のよっ！」

霊夢が御札で魔理沙の周りに結界を作り、アリスが人形を器用に繰って弾幕を放つ。

「魔理沙、動ける？」

「動けないわけないだろ・・・っ！」

「動けてないじゃないの。とりあえず、動けるようにしとくから・・・！」

結界の陰で、霊夢が魔理沙の服をめくりあげ、腹部に『金色の装飾が為された不思議な御札』を貼る。

「痛みとかはきえないけど、これである程度は動けると思うわ」

「あ、ああ・・・すまない」

「謝らないの。私達は好きでやってるんだから」

「そうそう。久々に、本気の一步手前まで出しちゃおうかな・・・」

つと！」

「効果は・・・もって3時間。それまでに辿り着けなかったら、諦めなさい」

魔理沙は、霊夢に立ち上がられ、少しよろめく。

「あと、ほら、これ。『霊撃 巫女用第二試作型』。自分が動けば霊撃結界も動くから・・・なるべく急ぎなさい。・・・私達が、この二人を足止めしておくから」

「わかった・・・霊夢、アリス、ありがとなっ！」

霊夢とアリスのいる紅魔館入り口をあとにし、パチュリーのいる紅魔館大図書館を目指す。

「・・・持って、くれよ・・・私の体・・・！」

「ねえ、霊夢」

「何よ」

「どうして、魔理沙の手助けなんてしてるの？」

「・・・知ってるくせに・・・。あんたと、同じ理由よ」

「ふん。ライバル同士、って訳ね・・・少なくとも、今は」

「共闘してるのに？」

「関係ないわ。敵が同じ、ってだけよ」

「・・・『紅い悪魔』を目の前にして、雑談とは余裕がましてくれんじゃないのッー!!」

「ああら、レミリア？気が動転して私の強さ、忘れちゃった？」

「ふん。どうせ私の本気の一步手前を出すほどじゃない程度でしょ。どうせ霊夢に負けるくらいなんだから」

「っこの・・・ぶっ殺してやるッー!!覚悟なさい!!」

「やってみなさいよ・・・魔神の子が、そんな殺気なんかで動じるわけないでしょ」

「紅符『スカーレットカルテット』！美鈴！咲夜！チルノ！早く来なさい！」

「ふふ・・・やっと、本気になったわね。『コッペリア』！」

「こんなのが本気になったところで・・・霊夢『夢想勦滅』！」

超弩級の虹色ともとれる様々な色の人形達と、同じく多数の陰陽玉に御札に針の怒涛が、四位一体のスペルカードを放ったレミリアに・・・否。レミリアたちに、
降り注いだのであった。

魔理沙が、真っ赤な壁に真っ赤な血の跡を残しつつ、階段を下る。
「はぁ・・・っ、はぁ・・・っ」

身体に大きな負担を掛けていると思わせるほど、苦しそうな魔理沙の呼吸に、もうメイド達は手出しできない。

「流石に、あんなになつてまでパチュリー様の事を想っていらっしやるのなら、いいんじゃないの？」

「これ以上痛めつけるのは、何だか気が引けて来るわ・・・」

認めつつある。紅魔館全体が、魔理沙とパチュリーを。レミリアは、望んではないが魔理沙と共にいるほうが幸せだと理解している・・・が、認めていないだけなのだろう。

「この距離は・・・かなり・・・きついぜ・・・。痛みで意識が飛びそうだぜ・・・」

「まーりさっ」

レミリアの妹、フランドール・スカーレット・・・彼女を、人は恐怖と畏怖を込めて『狂気と凶器の悪魔の妹』と呼んだ。

495年の間、幽閉されていたのが紅霧異変を契機に狂気に振り回されることがほとんどなくなり、幽閉が解かれたという話。

その一件に、深く魔理沙も関わっていた。

故に、フランドールとは友好関係にあった。

「・・・止めに、来たのか？」

「ううん。魔理沙、私は貴女を止めたりなんて・・・出来ないよ」

「姉の・・・レミリアの命令でもか？」

「お姉さまが何て言おうと、私は、貴女のしてる事が間違ってるとは思えないの。だから、行って？パチュリーのところに」

「・・・なら、どうして出てきた？私の今の状態、わかってるだろう？」

「うん・・・だから、これ」

フランドールが、その懷から低純度だがサファイアの入った首飾りを取り出す。

「お姉さまがね、昔咲夜にあげようとして断られたものの。『傷の痛みを感じなくさせることが出来る首飾り』だって」

「・・・私がもらってもいいのか、それ・・・」

「うん。これね、もういらなんだって。だから、魔理沙にあげる。・・・その・・・がんばって、ね？」

「・・・ああ」

フランドールから首飾りを受け取り、その血に塗れた首に掛けた。

「・・・痛くは、なくなったが・・・妙な倦怠感が残るな・・・。

礼を言うぜ、フラ・・・」

振り向けばそこに、フランドールの姿はなく。

残されているのは、一枚の紙だけ。

『紅魔館にも、遊びに来てね？

Fl

and ole Scarlet』

ただ、そう、稚拙な字で書かれているだけ。彼女なりの、求めだったのだろう。

「ああ・・・必ず、また来るぜ。・・・それまで、待ってるよ、フラン」

「やっと、ここまで来た・・・っ」

図書館の目の前で、ポツリと呟いた。

「扉は・・・開かないだろうな・・・」

ノブを引いたが、回りもしない。

幻視してみた。やはり、魔法が効いている。

「・・・ふん、これくらい、私の新スペルで・・・」

傷が開き、瀕死に陥るのは確実。それでも、彼女は止まらない。やめようとしなない。

それほどまでに、『今』という時に、『パチュリー』という目的に執着・・・否。固執しているから。

詠唱・・・の代わりの言葉で、体の負担を減らすための魔法をめぐらせつつ、『新スペル』の発動に構える。

「Do you still shut yourself up?
Go out gently?」

まだ、閉じこもってるのか？ いい加減、出てきたらどうだ？

「If you don't come out」

どうしても出て来ないってんなら

「I composedly take you out!」

私が無理矢理連れ出すぜ！

「極砲『ジェノサイドスパーク』!!」

魔理沙の広げた手から、青白い巨大な光が弾ける。

扉にぶつかり、ありえないほどの輝きが扉に満ちる。

魔法陣が最大出力で扉を守る。

だが、ジェノサイドスパークの威力に、次第に押されてしまう。

「はああああつ！」

突然、魔理沙の身体中の傷が開き、その場に血が滴る。

「あああああああつ！」

魔法の出力に耐え切れなくなった手が、握られていく。

（まだだ、まだだ私！こんなところで倒れるわけにはいかないんだっ！）

パチュリーを連れ出すと決めた時から、倒れない覚悟があった。

それは、倒れる覚悟よりも、何倍も辛い覚悟。

倒れても、再び立ち上がり、歩き出す覚悟。

何より、パチュリーの為にした覚悟・・・。

（ここで止まったら、もう歩けない、倒れてしまう・・・！）

「っらああああ！」

握りきりそうになった手を開き、失血で朦朧とする意識に、ただ命令したのは、「パチュリーを連れ出すこと。こんなところでは、倒れられないから。ただ、それだけは。」

ドオンッ！

爆発音と共に、ジェノサイドスパークとレミリアの防護魔法が掛かった扉は相殺され、綺麗に魔法陣の部分だけ消滅。扉は、容易に開いた。

「ぱ・・・ちゅ・・・りい・・・」

ほとんど光を失ったように見える魔理沙の眼。半分倒れたように、前屈みに歩くその姿は、痛々しいと言う領域を遥かに超越している。

「魔理沙さん！」

駆け寄ったのは、子悪魔。背中に、バッグを背負って、魔理沙を肩に受け止める。

「待っててください！今、治療します！」

「・・・こ・・・あく・・・ま」

「な、何ですか？！」

「急いで・・・くれよ・・・」

「わかつてます！」

魔理沙は、そこで意識が絶えた。血が足りなかったからか、子悪魔に安心したからか。

本人にもおそらく、ずっとわからないままだろう。

「んっ・・・」

「魔理沙さん！目が覚めましたか！」

次に魔理沙が意識を取り戻したのは、先ほどと同じ場所。

傷もともに塞がっていないが、服も交換され、止血や包帯等の応急処置はされている。

「子悪魔・・・ありがとう、感謝してもしきれないぜ・・・死にそうだったのは、事実だからな」

「ええ。増血剤と、少しですが輸血もしておきました。多分、もう大丈夫だと思いますよ」

「なあ、ところで・・・」

「パチュリー様は、ご自分の書斎にいらっしゃいます。行かれるのですよね？」

「ああ・・・」

「お気をつけて。くれぐれも、無理はしないでくださいね」

「わかってるぜ。もう、あんな無茶しない」

「・・・はい。悲しむのは、パチュリー様だけではありませんから」

こんこん。

パチュリーの自室に、ノックの音が響いた。

「パチュリー」

「外の騒ぎは、貴女ね」

扉一枚はさんで、想い人がいる。その事実、魔理沙は今にも泣き出しそうだった。

しかし、我慢した。大好きだからこそ、泣く様なみつともない真似はできない。

「ああ。お前を、連れ出しに、な」

「全く・・・貴女も貴女だけど、レミイもレミイよ。そんなに騒ぎ立てるほどでもないのに」

「お前にはまだ、わからないだろうな」

「本当に。わからないわよ。一体どうしてそこまでできるのか・・・」

数秒の間をおき、魔理沙が言葉を紡ぐ。

「実はな、パチュリー」

「なによ」

「連れ出すのは、最大の目的であって、最低限の目的は・・・私の本音を、お前に伝える事なんだ」

言葉の流れに、迷いはない。澄みきった、濁りなく感情の伝わる声。

「・・・そう。だったら、何だっというの。言いたい事言っただけ帰る気？」

それに、パチュリーは戸惑った。気持ち、魔理沙の想いを感じるからこそ、攻撃的な態度をとってしまう。なぜかはわからない。でも、何だかもやもやする。

「お前の本音も、聞きたいんだ」

優しいのに、言葉は、とても温かいのに、パチュリーの心の壁を溶かさない。砕いていく。

「・・・なによ、まるで・・・私が、貴女を気にしてるみたいな言い方・・・しないで・・・よ」

もやもやがどんどん膨らんで、パチュリーの涙を誘う。だが、以前のようなわけのわからない怒りは少しも湧いてこない。むしろ、哀しい、切ないと言った感情。

「気にしてくれてると嬉しいぜ・・・まあ、そんなの、聞いてみないとわからないがな」

「何を？言ってみなさいよ」

魔理沙が、呟く。深く深呼吸し、見合わぬ小声で、しかしパチュリーに確かに届くように。

「私、霧雨 魔理沙は、パチュリーのことが・・・好きだ。願わくば、それに対する返答を戴きたい」

言った、言えた、言っただけ。伝えることが出来た。これで、後悔は、少なくともしないですむだろう。

「・・・」

返答はない。わかってた。パチュリーは、自分のような人間ごときに振り向くはずがない。ほんの少し、希望を持っただけ。

これで、少しでも自分を向いてくれたら、と。

「・・・じゃあ、私、帰るぜ。もうすぐ、夕飯の支度をしないと間に合わないからな・・・」

（え・・・？）

答えを出すまで、待っていてくれると、甘えていたのかもしれない。

踏み出す勇氣を持てるまで、ここにいてくれると、^{すが}縋っていたのかもしれない。

でも、

でも、ここで言わなければ、私は、後悔する。自分を、永遠に許せなくなる。

気がつけば、彼女は椅子を立ち、扉へと向かっていた。

魔理沙が踵を返し、歩こうと前に一步踏み出そうとした、その瞬間。

「待って！」

ばん、と扉の開く音。床を踏みしめ、背後の少女は叫ぶ。

「魔理沙っ！一回しか言わないから、よく聞きなさい！」

「私は・・・パチュリー・ノーレッジはっ、魔理沙のこと・・・大好きなんだからあああっ！」

だん、とかけだし、振り向く魔理沙に、飛びついた。

受け止めきれず、魔理沙は、図書館の床に倒れた。

「・・・パチュリー？」

「ひっ・・・く。・・・うう・・・」

「泣かなくていいから、な？」

魔理沙が、その紫色の帽子を、撫でる。

「魔理沙あああ」

「わ、泣かなくていいって・・・」

魔理沙の胸に顔をうずめ、パチュリーは泣きじゃくった。それはも

うしゃっくりが出るほど。すごい勢いで。

「寂しかったの！会いたかったの！どうして、気づいてくれなかったの？！」

「・・・ごめんな、パチユリー。どうかしてた。お前は、そういう奴だったのにな」

「謝らなくていいからっ！代わりに、もっと一緒にいて！いつそ紅魔館で暮らして！」

「パチユリー。ちょっと、いいか？」

パチユリーは、涙でべたべたの魔理沙の服から顔を上げて、
「・・・何よ」

と、鼻先と目元を真っ赤にして、呟いた。

「ちよつと、今日は、私の家に行かないか？いろいろ、見せてやりたいんだ。・・・本じゃわからないような、いろんなことを」

「・・・たとえば？」

「そうだな・・・こんなこと、とか？」

「んっ・・・！」

唐突に、魔理沙は唇を重ねる。

「ま、魔理沙・・・！」

パチユリーの普段は白い顔も真っ赤になっている。

「冗談だよ。・・・実験とか、失敗反応の研究とか」

「・・・もう。・・・びっくりしたんだからね」

「つつっ・・・」

「どうしたの、魔理沙？」

「な、なんでもないぜ？」

「・・・ほら、嘘ついてる」

「え？」

「私に見えないように、ってシャツの中にだけ包帯巻いても、わかるのよ？」

「は、はは・・・面目ない、申し訳も立たないぜ」

「何がよ・・・。大怪我してるじゃないの・・・私のために、ここ

までする意味があつたの？」

「現にこうして、お前が私の目の前にいるぜ？」

「・・・そう、ね」

「で、どうだ？今日は、家に来ないか？」

「・・・いいわよ。どうせ、あなたの家の方が治療薬、あるんですよ」

「ああ。もちろんだぜ・・・じゃあ、箒！」

魔理沙が叫ぶと、「打てば響く」の如く箒が飛んできた。

途中、子悪魔の「ひゃあっ」と言う声は気にしない気にしない。

「乗れ、パチユリー」

「貴女、そんな箒なんて乗って大丈夫なの？！」

「気にするな、魔法くらい使える。霊夢とフランと子悪魔から、一応処置は受けてあるから大丈夫だ」

「私も、手伝うわ。あなたに、死なれたくないし・・・」

「ああ、頼むぜ。『イリユージョンレーザー』！」

魔理沙の手から、割と大きな、雨戸も閉じられた窓に向けて、レーザーが撃たれた。

「さあて、飛ばすぜえ！」

「ちょ、ちよつと・・・！」

びゅう、と風の音がしたかと思えば、もうそこに二人の姿はなかった。

子悪魔は、それを見届けると、『吸血鬼復活因子改薬用解毒剤』と長ったらしく書かれたビンを開け、飲み干した。

「お幸せに、魔理沙さん、パチユリー様」

空のビン窓のあったところから覗く空に掲げ、子悪魔は「乾杯」と呟いた。

「ほら、見なさいよ・・・あの二人の幸せそうな顔。二人とも、なんだか満足くって感じじゃないの」

「本当ね・・・私達じゃ、あんな顔は絶対させられたもんじゃない

わね・・・あんたもよ、レミリア」

「そうね・・・パチエ、戻ってくるわよね・・・？」

「信じなさいよ、あんた、あの紫もやしの親友でしょ？」

「・・・ええ」

三人は、二人の魔女が空を飛ぶ姿を黄昏に仰ぎ、笑っていた。

悔しいくらい幸せそうなああの二人に負けなくらいの恋をしてやる、と二人は少し呟いた。

全てが曖昧に、そして鮮明になる時間。

二人は、魔法の森へと箒を走らせていた。

「どうだ？こんな時間も、悪くないだろ」

「そうね・・・でも、もつと遅く飛べないの？」

「ああ・・・傷の問題もあるしな」

「・・・卑怯よ・・・」

「はは、たしかに」

何気ない話に、二人は確かに、幸せをかみ締めていた。

そこにいることに、互いに、愛を感じていた。

今は、ただそれだけでいいから

N D

T h e E

完結篇「彼女の結論」（後書き）

・・・もし上から全部読んだなら、あなたはすばらしい人ですね。文才のかけらもないのに、ありがとうございます。

もし飛ばして後書きだけ読んでもらうなら、再会したあたりからでも読んでいただけると嬉しいですね。

もう少し許される時間があるなら、感想とか残してくれると僕はとっても喜びます。跳ね回ります。

あと一つ、ヤンデレ話を書いて終わりにします。

後日談〈a f t e r e v e n t : f i r s t d a y (前書き)〉

本編より長いのは、事細かに、この三日間を書いたからだと思ってください。

ひとつにまとめると、軽く見積もって八万八千文字。

正確に言うなら八万九千六百六十三文字。

今回のコンセプトは『繋がり』です。

・・・さあ、この先、さらに小一時間つぶすのでしたら、どうぞお読みくださいな。

後日談　a f t e r　e v e n t : f i r s t　d a y

魔理沙とパチュリーの一件から少々、紅魔異変から二ヶ月経とうか経つまいか。

これは、魔神の娘と噂される人形遣いと、『自称・ブラドゥツェペシュの末裔』の吸血幼女が引き起こす、惨劇と狂喜と幸福の入り混じる三日間の出来事。

「パチエ・・・なんで、魔理沙なの？どうして、よりもってあの白黒魔法使いなの・・・？」

「・・・・・・お嬢様」

「・・・いいの。これは、私の身勝手なただの虚勢。貴女が目を向ける必要はないの・・・私を止めさえしなければ、休んでいていいわ」

「いいえ。私は、お嬢様に仕える者。お嬢様のなさることなら、私は、お手伝いさせて頂きます」

「ありがとう、咲夜・・・」

（それと、ごめんなさい・・・）

紅霧異変から二ヶ月経とうとしている、ある日の夜。

再び画策をめぐらせる吸血鬼に呼応するかのように、丸い月は紅に耀いている。

彼女は、友情ゆえに吸血鬼の狂気に吞まれつつあった。

そう、あの時の彼女の妹のように

。

魔理沙がパチュリーを連れ出して数日。

魔理沙の話を聞き、パチュリーは魔理沙と暮らすことを快諾。

隣り合って本を読んだり、魔法の実験をしたり、これでもかと言う

ほど幸せな数日を過ごしていた。それこそ他人が見ると『二人つきり結界』の類でも発動している錯覚を覚えるほど。

「パチユリー、本を借りたいんだが・・・」

「あ、魔理沙。どんな本？」

「『拡散呪文大全』って言う本だぜ」

「ああ、これね」

パチユリーは目を落としていた本を魔理沙に差し出した。

「・・・読んでたならいいぜ。また今度貸してくれ」

霧雨邸地下図書館。

魔理沙とパチユリーの魔法で、紅魔館地下図書館が丸ごと霧雨邸の地下の巨大な空間に移された。

「あら、いいのよ。もうこれ、読み飽きてるし・・・何か実験でも？」

「ああ・・・広範囲型拡散マスタースパークを創ろうかと思ってな」

「へえ・・・今でも充分なりーぢゃないの」

「直線式だからかわされるとどうにもならないんだ。後に出来る隙の問題もあるし」

「なるほど・・・だったら、この本も使ったら？」

「・・・『多角魔法陣・拡散の章』・・・？」

「四角魔法陣以上角が多い魔法陣の事を、『多角魔法陣』と呼ぶのは、魔理沙も知っての通りよね？」

「おう。基本事項だからな」

「で、これは魔法陣から発動するマスタースパーク自体の情報を書き換えて、拡散能力を追加するための学術書。多分、スペルカードから展開する魔法陣の書き換えも載ってると思う」

感心している魔理沙に、パチユリーは二冊の本を渡す。

そして微笑み、

「完成したら、私にも見せてね」

魔理沙もそれに応え、ニツと笑ってみせた。

「任せろ。お前も納得するような完璧な『拡散式マスタースパーク』

を作り上げてみせるぜ」

明朗快活、天真爛漫とは彼女の代名詞ではないか。

パチュリーはその目に映る少女に、唐突に抱きつきたくなった。

しかし我慢し、

「期待してる」

とだけ言った。

「じゃあ、また後でな！」

魔理沙が、手を振りながら図書館をあとにする。

パチュリーが、魔理沙の去った後の扉を、しばらく眺めていると、

「ごきげんよう、パチエ。なんだかとてもいい雰囲気じゃないの」

背後から、幼い少女の声。

明るく聞こえるが、何か奇妙な違和感がある。どこかが、欠けている様な、そんな感触・・・悪寒にパチュリーは背筋をなぞられた。

「久しぶりね。寂しかったわよ？」

「・・・どうして、ここにいるのかしら？」

無意識に恐怖しているのか、声に震えが出ている。

親友に何故恐怖しているのか、自分でも全くわからない。

「あら、貴女もわかってるくせに。・・・転送後の魔法の形跡を追ってきたのよ」

「相変わらずの天才っぷりね・・・レミィ」

パチュリーが振り向けば、そこにいるのは妖しく微笑む吸血鬼。

本棚にもたれているその姿は、二人の出会い頭の・・・レミアが

『赤い悪魔』と呼ばれていた頃を思い出させた。

ただ、友に会いに来たというだけではなさそうな、含みのある笑み。いつもより紅く見えるその瞳の奥には、何か画策が潜んでいるように思えた。

「・・・何を、企んでいるのかしら？」

「あら、私はただ、貴女に会いに来ただけよ？あの白黒との、新居

を見る」

嘘。全くだらめ。それをわざと明らかにするような口調が、逆にパチュリーの恐怖を煽る。

「・・・お生憎様、ここは紅魔館のτσう代わらないわよ？」

「そうね。ちよつと残念。ところでパチエ」

「何？」

「紅魔館に、帰つて来る気はない？」

（狙いは、これか。私を、紅魔館に戻して、いつも通りにしたい、という事・・・？）

「・・・ええ。魔理沙が紅魔館で住むといわない限り、戻る気はないわ」

「そう。・・・残念ね」

「また来ればいいじゃないの。貴女の魔法なら、ここに転移魔法を張るくらい簡単でしょ？」

「そうじゃないのよ。素直に戻つて来るならよし、そうでないなら・・・って考えると、パチエを傷つけちゃうのが、残念で仕方ないのよね・・・」

少し楽しそうな、正確に言えば楽しい事を待ちわびているような、静かなら『わくわく』という擬音語すら聞こえてくるような雰囲気。少なくとも、残念がつているようには見えない。

「・・・どういう事？」

パチュリーはレミリアの放つた言葉に、一瞬の戦慄が走つた。

「貴女は、まだ知らなくていいわ」

直後、レミリアは姿を消す。

「?!」

どすつ。

レミリアの姿を認識した直後、腹部・・・鳩尾に突きが入れられていた。

「レ・・・ミィ・・・」

「貴女は・・・私といったほうが、何倍も幸せになれるの・・・だか

ら、戻ってきて」

パチュリーは、その言葉を聞くと、見下ろしていたレミリアの「魅了の魔眼」で意識を奪われた。

最後に見たレミリアの表情は、一昔前の『紅い悪魔』と、そして

その妹の、狂喜に歪んだ残酷な笑みだった。

「パチュリー、ちょっと教えて欲しいんだが・・・」

図書館に入ってきた魔理沙が見たのは、机から落ちた本と、倒れた椅子と、月の飾りが入った紫の帽子。そして、転移魔法の反応が少し。

魔理沙には、これだけそろえば何が起こったか粗方の理解が出来た。

「・・・レミリアっ!!」

「あら、察しがいいのね」

叫ぶ魔理沙に、どこまでも冷静なレミリアが、本棚の陰から現れた。

「ふふ、どうやら少しばかり手を抜きすぎたようね」

「パチュリーをどこにやった!・・・聞くだけ野暮か」

「あなたには絶対見つからないところ」

微笑んでレミリアが呟く。

魔理沙も、パチュリーと同じくレミリアから悪寒を感じ取っていた。

「貴女なんかに、うちの鉄壁が破られるとは思えなかったけど・・・

まあ事実よね」

「・・・」

「ああ、気にしないで。もう、パチエは渡さないから」

「どういう意味だ?」

「そのままの意味。・・・貴女がパチエを奪うなら、私はパチエを奪い返して貴女を・・・削除する」

パチュリーの時と同じ。姿を消したと思えば、懐にいた。

しかし今回は爪を立てての斬り上げ。魔理沙の顎を貫通させる勢いで、放たれる。

「つく！」

だが、警戒を解かなかつた魔理沙は、紙一重でかわした。つう、と魔理沙の頬から目じりにかけて、傷が伸びている。

「あら？今のをかわしたの。流石ね」

「何のつもりだ・・・こんなこととしてパチュリーが喜ぶとでも・・・」

「何を言っているの？」

「っ？！」

紅い光が魔理沙にめがけて放たれる。

それを直前で反応し、緊急回避に転げた。

「パチエは、貴女が死ねば、私といるのが一番だって、わかるの。」

貴女が死ななきゃ、貴女という愚かさにパチエは気づかないままなのよ」

今度は蝙蝠。

魔理沙はマジックミサイルとイリュージョンレーザーで応戦、相殺した。

「ど、どういうことだ・・・っ」

「貴女というよりね、パチエは私といるほうが幸せに暮らせるの。ほんの百年持たずに死んじゃう貴女より、ずっと一緒にいてあげられる私の方が・・・幸せにできるの」

紅い弾丸を、レミリアは幾十といわずものすごい数、魔理沙に向けて撃つ。

マジックミサイル、イリュージョンレーザー、コールドインフェルノ・・・どれも、止められはしなかった。

魔理沙は、もろに弾丸を喰らい、後ろに吹き飛んだ。

「ぐう・・・」と呻き、壁にぶつかり、座りこむ魔理沙。

「それに、私の方が、パチエをたくさん知ってるの。パチエの弱点、長所、血を吸うときにどんな声で鳴くかも・・・可愛いわよお、吸

血されたときのパチエ」

少しずつ歩きながら魔理沙に近づき、胸倉を掴む。

口の端に血がついている。

持ち上げて、拳でそこを殴った。

「うつ」と、声を漏らした。

「苦しい？辛い？あなたには、それを受ける責任があるのよ。パチエを、私から奪おうとしておいて、幸せだけを掴もうだなんて甘いのよ」

魔理沙のしているレミリアは、以前のレミリア・スカーレットでも、『紅い悪魔』と呼ばれていた頃の彼女でもない、どこかが狂っている。パチュリーしか、見えていない。他のものは、何も眼中にない。その事実には、魔理沙は震撼した。恐怖した。絶望した。

彼女は、自分と戦っている気など、少しもない。

しているのは、邪魔者の排除。壁の突貫。障害物の破壊。

霧雨 魔理沙との、決闘ではない。

蟻を踏み潰す程度の気持ちで・・・蜘蛛の足と下半身を引きちぎって遊ぶようなつもりで、自分の目の前にいる。

「く・・・」

「あら、まだしゃべる気力が残ってたわけ。じゃあ、ちょっと本気で行くわよ」

軽く投げて、壁に叩きつける。

「デモンロードウォーク」

二回、瞬間移動のように跳び、魔理沙をその勢いで跳ね飛ばす。

「デモンロードクレイドル」

浮いたところにさらに下からの頭突きを加え、浮かせた。

「シーリングファイア」

跳躍で魔理沙の真上の屋根にぶら下がり、そのまま屋根を蹴って

魔理沙に突進。

魔理沙は叩き落とされ、床に放射状のひびが入った。

「デモンロードアロー」

宙に浮き、魔理沙に思い切りタツクル。

魔理沙のまわりのひびは深くなり、痛みにした打ち回ろつととつとした。

「何動いてんの？」

魔理沙の至近距離に跳躍し、足を後ろに振りかざす。

「ロケット・・・キックアップ！」

魔理沙を、レミリアは八割程度の力で蹴りあげた。

天井にぶつかり、再び床に落ちたとき、魔理沙に意識はすでない。「ふふ、案外あつけなかったわね・・・」

その手に握られているのは、無詠唱で取り出した神槍・グングニル。

「さようなら、『東洋の西洋魔術師』」

それで魔理沙を貫く・・・

「何やってるの、レミリアっ！」

直前に人形繰り糸で動きを止め、人形の弾幕の構えで魔法を封じる。「っ・・・?!」

レミリアは身体に力を入れても鋼鉄の如く堅い糸に縛られて動けず、魔法を使おうとすれば上海・蓬萊のレーザーや倫敦・和蘭の弾幕に撃たれるであろう状態のまま、あたりを見回す。

「痛めつけて動けないようにするだけって言う指示でしょ?!」

まわりに接近用の人形を配置し、「七色の人形遣い」アリス・マ―ガトロイドは現れた。

「そう言う貴女もパチエの監視が役目の筈よね？」

アリスでさえも怯むほど恐ろしく、かつ光のない目でレミリアは睨む。

「咲夜に任せてきたわ・・・それより！殺さない約束よね?!」

「あら、そうだったかしら」

「しらはつくれても無駄よ！」

「ふん・・・じゃあ、私は咲夜のところに戻るわ。その白黒は、好きにしているから・・・この糸を解いて頂戴」

グングニルを消し、殺意がないと見たレミリアを、アリスは開放した。

今度は魔理沙に糸を絡ませて・・・

「始めからそのつもりよ。・・・さあ、魔理沙。私の家に行きましよう?」

魔理沙を立ち上がらせた。

アリスの表情はまるで自分が動かしている、という風はなく、魔理沙自身がその意思で立ち上がったかのような表情をしている。

「・・・ずいぶんと悪趣味な真似をするのね」

「貴女だって。あのもやしを椅子に拘束しておくだけじゃなくて猿轡に目隠しまでして・・・どっちが悪趣味よ」

「念には念を、っていうでしょう?パチエは元気だとすぐ逃げちゃうから」

「親友らしからぬ発言ありがと。じゃあ、私は家に帰るわ」

「さようなら、アリス」

アリスは首をもたげている魔理沙を腕を組んでエスコートし、レミリアは魔法を使って図書館から出た。

昼間から静かに進行していく事態。

狂喜と、狂気が齎す結果が、何かもわからず、彼女達は行動を開始した。

後日談／after event：first day（後書き）

まあ、まだこの先は遠いので、特に書くことは・・・。

後日談／after event: first day 2 (前書き)

一日目、後編。

パチエがフランと一緒に拘束されていた紅魔館から抜け出すところ
くらい。

「パチエ、起きてるかしら」

「むぐ・・・」

紅魔館の地下の一室。灯り一つだけで、非常に暗い空間。

コンクリート固めで、魔法で換気されているようだ。

『ようだ』がつくのは、身体を椅子に縛り付けられ、猿轡と目隠しがつけられているからである。

それにしても、縛り方が嚴重すぎる。太股を椅子の前半分に縛られ、背もたれに上半身を、手首までも拘束されている。手を開いて指で魔法を使わないように、握った状態で手が嚴重に縛られている。とても痛い。

パチユリーにレミリアが近づき、猿轡を外す。

そして耳元で「詠唱なんてしたら・・・どうなるかわかってるわよね？」と、パチユリーに警告した。

「一体、何故こんな事をしたのかしら？」

「あなたのためよ、パチエ」

「・・・どうということ？」

「そのままの意味。あんな白黒と居たんじゃ、貴女が不幸になる。だから、救ってあげたの」

「余計なお世話よ、私はあれで十二分に幸せだったわ！」

「がたつ、と椅子を揺らして、言い放つ。

「わかってないわね。あれじゃ、あいつが死んでから哀しくなるだけよ？」

「それでも構わないの。私は、魔理沙がいる今を、大事にしたいの」

「・・・それで、死んだら私のところに戻ってくるわけ？慰めてもらいに？」

「貴女がそれを拒めば、そんな事はしないわ」

「いいのよ、パチエ。でも、そんなの悲し過ぎるじゃないの。だから、私が惨劇を未然に防いでるわけ」

「・・・そんなの、自己満足どころかただの妄想・・・」

「違う！」

レミリアが突然叫び、壁を殴る。

殴られた壁は「バリイ」と音を立て、ひびが入った。

「妄想なんかじゃない！私が、私だけが貴女を幸せにできるの！あなたをあいつより昔から知ってて、あなたをあいつより深く、強く愛してるの！」

ぎりつ、と強く奥歯をかみ締めるレミリア。

握りこんだ拳からは、血が滴っている。

「いつ出会ったかじゃない、どれだけ愛しているかじゃない・・・どれだけ私が、魔理沙を、あなたを好きか、って事なの。貴女のその、私を想う気持ちにはわかった。でも、違うの。私は、貴女より魔理沙の方が好きなの・・・ごめんなさい」

パチュリーが、ごく落ち着いて、興奮しているレミリアを説き伏せる。

「謝らないでよ。私は、あの白黒から、貴女を取り返したいの。あいつに侵された貴女の心を、元に戻したいのよ。そのためなら・・・なんだってしてやるんだから」

去り際の最後に一言、落ち着いたレミリアが、意味深な言葉を発した。

扉を開いた直後、レミリアが指を上指し、魔法陣を描く。

そしてパチュリーは、再び眠りについた。

その夜、満ちつつある紅い月に照らされ、ただでさえ真つ赤な紅魔館がさらに深紅の映えるものとなっていた。

「・・・咲夜！」

「何か御用でしょうか、お嬢様」

レミリアが呼べば、時を止めて咲夜は現れる。習慣となったレミリ

アは、もう咲夜の方など見ていない。

「パチエは？」

「相変わらず意識を失ったままでございます」

「そう。引き続き監視をよろしく」

「畏まりました」

咲夜が時を止めて去り、レミリアは再び紅茶を口にする。

（冷めてきたわね・・・）

そう思い、口を離すと、

「お嬢様！」

レミリアの背後で、咲夜の声が。

彼女らしからず、とても焦っている様子。

「・・・何よ、そんなに慌てて。パチエが逃げでもしたの？」

「それが、そうなんです！ その、脱出には子悪魔も手伝ったよう
で・・・」

「・・・何をそこまで焦っているの。時を止めてあたりを探しなさい」

「それが、もう周囲にはいなくて・・・！」

「どうやって逃げたのかしら・・・警備は万全だったはず・・・」

「どうやら、フランドールお嬢様も関わっているようでして・・・」

「っ！？ フランが？！ そんな、どうして？！」

「わかりません・・・でも、フランドールお嬢様も一緒に姿を消してしまわれたので・・・」

「く・・・屋敷を空にしてもいいわ！ 外の権力の及ぶところ全てを使って、探させなさい！」

「は、畏まりました」

咲夜は今度は時間を止めることなく、宙に浮いて飛び出した。

レミリアは恐れていた事が現実となり、焦りと怒りでその紅い目を光らせて夜の帳へと降り立った。

（パチエ、こんなにもあの白黒に毒されてたなんて・・・！）

「パチュリー、ここまで来ればもう上に出ても大丈夫かな・・・？」
「ええ、紅魔館からだいぶん離れたわ・・・それに、もうこの焦げ臭い土のにおいは・・・」

「じゃあ、行くよ・・・禁忌『レーヴァテイン』！」

スペルカードから放たれた炎の波によって、土だった上は空に見える穴となった。

余熱で泥土が固まり、崩れる心配がなくなったのを確認すると、

「うん、もう大丈夫。じゃあ、でよっか」

「ええ」

宙に浮き、その穴から外へと飛び出した。

月明かりに照らされ、紫色のキャミソールが土で汚れているのがわかる。

パチュリーは、服についた土を手で払う。

隣にいるのは、金髪の幼い少女。土だらけでも一切気にしていない様子。

彼女は、フランドール・スカーレット。生誕五ヶ月程度で吸血鬼の狂気に吞まれ、それを危険視した姉のレミリアが幽閉した。

だが、紅霧異変をきっかけに狂気から幾らか解放され、通常の生き物の思考ができる程度まで回復した。だが、基本は底抜けに明るい故にどこか少しずれているところも感じられる。

「ねえ、フランドール」

「なあに？」

「あのレミィ、何かおかしいわよね」

「そうだね・・・」

「貴女、何か知らない？」

「んとな・・・ちよつとだけ、知ってる」

「ちよつとだけ？」

狂気の原因に『ちよつと』という言葉が入るのに、少し違和感を感じた。

「うん、今のお姉さまね、閉じ込められる直前の私みたいなの」

「どういう事？」

「あのね・・・」

それから、フランドールは昔の事を話し始めた。

私ね、始めは、吸血鬼じゃなかったの。

それでね、でも『吸血鬼になるべくして生まれた身体』なんだ、つてお姉さまに教えてもらったの。

私とお姉さまのお母様・・・正確に言えばレミリアお姉さまの本当のお母様で、私は養子なんだけど・・・そのお母様が、私を養子に引き取った日、私の人の頃の友達だった『アル』っていう子の住んでいた村が、お母様とは別の一族の吸血鬼の集団に襲われてたの。

それで、レミリアお姉さまが教えてくれて、すぐに飛んでいったの。

そしたら、アルが吸血鬼に殺されそうだったの。その一族は、人間を殺して血を吸ってたの。私も食事はずっとそれだけど・・・で、殺されそうになったところを、レーヴァテインで助かったんだけど、一緒にアルまで焼いちゃって。

アルが黒い炭になって、私はそれを抱きかかえていっぱい泣いたの。

そしたらまた吸血鬼が復活して、私に襲い掛かってくるのよ。

私、そのときにはもうおかしくなっていたのかもね。

何がなんだかわからなくなって、近くにあった井戸水で濡れてる銀の十字架で、吸血鬼を思いつきり貫いて、殺しちゃったの。

それで吸血鬼が私に倒れてきて、蹴って、地面に飛ばして、銀の十字架がキラってして、血もその光に反射してキラってなって、そこから何にも覚えてないの。

気がついたら閉じ込められてた。

「・・・で、そのアルが死んじやった後の私の感じが、レミリアお姉さまから感じるの。あの時の私が、お姉さまの中にいるみたいな

の」

「友情故の狂気・・・吸血鬼って、何だかよくわからないわね・・・とにかく、湖を越えて神社に行くのが先決ね」

「うん、そうだね」

パチュリーとフランドールは、ふわりと空を飛び、湖を渡り始めた。

「ちょっと待った、ここから行かせるわけにはいかないね！」

立ち塞がる氷精に、

「ここで私達とであつた事は、誰にも言わないこと！ 言ったら、自分で自分を殴ること！」

「・・・わかつたわ」

『魅了の魔眼』で無茶な命令をしてスルー。

「待つて、こんなところに図書館っ子が何の用？」

「うるさい、だまれ！」

「・・・あ・・・っ・・・」

宵闇の妖怪も声を封じた。

「ちょっとー、霊夢いるー？」

「・・・図書館二ーと」

「どうでもいいからちよつと入れて頂戴」

「・・・勝手にすれば」

「じゃあ、お邪魔します」

「おじゃましまーす」

博麗神社、霊夢の生活空間と化している本殿。そこにフランドールとパチュリーはあがりこんだ。

「で、図書館二ーとが神社に何の用よ。まさかお賽銭入れに来たわけじゃないでしょうし」

「ええ、違うわ。ちよつと、匿って欲しいの」

「なんで？ていうか、魔理沙から何で匿うわけよ」

「違うの、魔理沙じゃなくてレミィから匿って欲しいの」

「・・・事情は、説明しなさいよ」

そこからパチュリーとフランドールは、大まかにこれまでの経緯を話した。

私は、レミィが紅魔館に私を閉じ込めて数時間経った頃に、私の監禁されている部屋に来たわ。

そして、私に催眠魔法をかけたつもりで行った。

猿轡をせずに放置したのがレミィの仇になったのね。防御魔法を詠唱しておいたの。

そして監視の咲夜が来るまでの数分、私は子悪魔に頼んだの。『フランドールに、私の部屋の方向である彼女の部屋から西の方角にレヴァティンを放たせて』って。

咲夜が来た瞬間、土水符『ノエキアンデリユージュ』と符の式『デリユージュフォーティディ』で咲夜を気絶させて、フランドールのレヴァティンが放たれて。

フランドールが子悪魔と一緒に開いた穴を通って来て、縄を解いて、地下を方角を確かめつつレヴァティンで穴を掘って途中まで来たのよ。

あ、子悪魔は図書館の真上で帰したわよ。あの子なら変な疑いもかけられることはないはずだし。

「・・・ってわけ。パチエは、私の所為でどこかが狂ってしまったみたいなの」

「なるほど、レプリカめ」

訝しみつつ、軽い冗談のつもりで言う。

「前にもいったでしょ、レミリアお姉様！」

「・・・あれはあれで冗談のつもりなのよ、フランドール」

「そうだったの・・・」

それは気づかなかったとばかりにフランドールは少々驚いた様子。
「コホン・・・事情はわかったわ、フランドール、貴女もここにどうせ居座る気でしょう？」

「まあ、パチュリーの脱走を手伝った当面、戻ったりしたら殺されるよね・・・」

レミリアを心配してか、それとも己が身を案じてか、悲しげにうつむいたフランドール。

それを哀れんだか、霊夢が、

「・・・確かに・・・ねえ、フランドール。魔理沙がどこにいったか、知らない？あなたの助けが、必要なの」

知っていると思われることを聞いた。これで、少しでも気分が和らげばと思ったのだ。

「えつとね・・・わからない・・・ごめんなさい、霊夢」

「・・・むう・・・そう言えば貴女は基本閉じ込められてたわね」

しかし、フランドールは答えられずに、霊夢は墓穴を掘る羽目となった。

「うん。そうなの・・・あ、でも、お姉様と誰かが『魔理沙』とか『パチュリー』とか話してたんだけど」

「共謀者・・・？なんとなく話がかめないわね」

「そう・・・じゃあ、とりあえず私は寝るわ。あんた達は好きになさい」

「私はちよつとご飯にいつて来る」

「・・・じゃあ、魔理沙と私の家に行っておくわね」

「・・・ちよつと待って、パチュリー。危険だと思うわ、それは」
「そう・・・わかったわ、ここで休ませてもらうわ」

後日談／after event：first day 2（後書き）

・・・銀色が私の好きな色です。

ついでに言つと、紅と蒼も好きです。

後日談 ｓ a f t e r e v e n t : s e c o n d d a y (前書き)

二日目です。

レミリアが厚着をして昼間も出歩いちゃいます。
アリスもかなり病んじゃってます。

後日談　after event：second day

明朝、博麗神社で目覚めたパチュリーは、少し考え事をしていた。

（・・・魔理沙がいるとすれば・・・紅魔館か・・・『共謀者』の
ところ・・・）

「あ、パチュリー。起きてたんじゃないの」

「・・・霊夢」

霊夢が、パチュリーの為に用意した寝室。

そのふすまから顔だけひょこつと出している。

「レミリアに手を貸したの、だれか知りたいんでしょ？」

「ええ、そうよ」

霊夢が部屋に入って、指を立てる。

「一人、協力してくれそうな奴がいるんだけど」

「え？」

「魔理沙のためだったら、何だってするような奴だから、多分動いてくれると思う」

「だれ、それは？」

「アリス・マーガトロイド。人形を遣う魔法使いで、この前の魔理沙とあんたの一件に、私の行動に協力してくれたの。きつと、今回も大丈夫」

「・・・本当に？」

怪しげに霊夢を見るパチュリーに、霊夢は頷いて見せ、

「可能性はある。あの娘も、魔理沙のこと好きだから」

「そう言われるとなんだか不安ね」

「なにいつてるの、貴女は『魔理沙のために動いてる』って言えばいいの。それでアリスは多分全力を賭してくれるから」

「そう・・・？じゃあ、そのアリスとやらの家を教えて頂戴」

「・・・説明が面倒ねえ・・・ちよつと待ってて、地図をかいてく

る」

数十分の後、霊夢は稚拙だがなかなかわかりやすい地図を描いて来た。

「香霖堂を基本に描いてるのね。割と理解可能だわ」

「割と、は余計よ。じゃあ、気をつけてね」

「・・・はいはい、行って来ます」

まるで霊夢は厄介払いをするように手を振って見送った。

香霖堂。

半妖・森近 霖之助が営む、外の世界の物も取り扱う雑貨屋と同時に、彼の住居でもある。

当然、庭先で掃除をしても、不自然ではないわけで。

「・・・ん？」

霖之助は、パチュリーを発見するや否や、声をかける。

「おい！」

「・・・森近 霖之助・・・？」

パチュリーに駆け寄り、軽く挨拶をする。

「確か・・・君は、紅魔館の・・・」

「パチュリー・ノーレッジ。名前も知らないのに声をかけたの？」

「いやその、前に紅魔館に『空間制御機』を見に行った時にちらっと見た気がして・・・」

「そう。ところで、貴方は『アリス・マーガトロイド』って奴の家、知ってる？」

「・・・えっと、ここからあつちに二里程行ったところだったと思うが・・・？」

「ありがと。・・・えっと、森近 霖之助」

「あ、ああ・・・別に、大したことは・・・」

ふわふわと少し浮いて移動するパチュリーに、少し霖之助は首をかしげていた。

「・・・三里だっけ・・・？いや五里ほどだったか・・・」
疑問の点がずれていることには、一切気づいていない。

白い清廉とした、というのが一番正しいだろう。

外観は、なんでもない普通の家。パチュリーの三十年程前住んでいた国では、ありふれているデザイン。

「・・・こんなところに、魔神の子が・・・？」

パチュリーは、マーガトロイド邸のドアをノックしたが、だれも出る様子はない。

「あら、鍵が開いてる・・・無用心ね」

パチュリーは扉を開き、無意識のうちに警戒し、音と気配を消していた。

声が、聞こえ始めた。

(むむむ・・・いやな予感がする・・・)

少しずつ進み、声の聞こえるほうへと行った。

だんだんと鮮明になっていく声。それは、よく知る声と知らない声。

「・・・アリス、もう放してくれ！」

(・・・魔理、沙・・・？)

「だめよ、魔理沙。貴女、そんなに怪我、してるじゃないの」

「いいから、自分で出来る！だから、開放してくれ！」

「だって、この糸を解いたら、貴女は逃げちゃうでしょう・・・？」

「お前が、こんなことしてるからだろ！ いい加減、やめてくれよ！」

パチュリーが覗きこむと、そこに広がっていたのは、あらゆる意味で怪奇。

魔理沙はシャツとドロワーズだけにされ、人形繰り糸で椅子に座らされている。

隣には、その繰り手と思われる少女が、包帯や薬を持って手当てをしているようだ。

しかし、最も恐ろしいのは、それではない。

「もう、そんなに言ったって、今の魔理沙じゃ説得力がないわよお？」

「な、どういうことだよ、それ！」

そう、最も恐ろしい、信じ難いのは・・・

「うふふ、だって魔理沙、私に手当てされて、とっても嬉しそう・・・」

「う、嘘だろ?!」

「本当よ、魔理沙。ほら、鏡を見てみて・・・?」

少女は半ば恍惚とした表情で、魔理沙の目の前に手鏡を見せる。

「そ、そんな、馬鹿な・・・こんなの、違う・・・私じゃない・・・！」

「ほら、魔理沙。貴女、こんなに嬉しそうに笑ってるじゃないの。それなのに、違うなんて、意地っ張りなところも可愛い・・・」

魔理沙が、少女の治療に、笑っているのだ。

口で、本気になって否定している彼女が、少女の薬のついた指が傷口に触れるたびに、少女の口から甘い、誘惑のような言葉が出るたび、嬉しそうに笑うのだ。

パチュリーは冷静に考えることが出来ず、立ち去りたいという意思も空しく体が動こうとしない。目が、放せなくなっていた。

「ふふ、貴女はもう、私の人形・・・そうなれば、貴女はずっと私の元で私に好きなだけ甘えられるのよ? 私に、好きなだけ頼ってもいいのよ?」

「う・・・煩い! パチュリーが、私にはパチュリーがいるんだっ!」

「・・・まだ、あの女の話をするの?」

さっきまで猫撫で声だった少女が、急に声色を冷たくした。

「私は、パチュリーと死ぬまで一緒だって、自分の中で決めてるんだ! お前の気持ちもよくわかった! でも、私はパチュリーが好きなんだ!」

（一緒。死ぬまで、一緒・・・魔理沙、私も同じ・・・一緒にいた

い・・・)

魔理沙にそこまでの覚悟があった事に、パチュリーは胸が熱くな
った。

「・・・わかってないわね。貴女は、もう私のお人形。どれだけあ
がこうと、私の意思には抗えないの」

「いいや、私は霧雨 魔理沙！ 人間だ！ お前の人形なんかじゃ、
断じてないぜ！」

「違うわ、貴女は人形。私の永遠の伴侶となる、人形なのよ・・・」

「私は、パチュリーとずっといる気だ。他の誰でもない、パチュリ
ー・ノーレッジ。そいつが、私の伴侶だ」

「ふうん・・・貴女が、死んだ後、あの子はどうするか知ってる？」

「・・・それは、その・・・」

「あのね、あの子は、貴女が死んだ後レミリアのところに行つて、
慰めてもらうのよ。それで・・・」

「もういい！聞きたくない！」

「あら、そう・・・貴方が嫌と言うのなら止めてあげる・・・。そ
うそう、その盗み聞き魔女」

「・・・！」

感づかれていた。始めから？いいや、きっとさつき、数秒前だ。

「あんた、何？鬱陶しいんだけど」

「・・・魔理沙を返して」

「はあ？ 魔理沙が、あんたのモノってわけ？冗談やめてよ！ 魔
理沙は、私のモノ！ もう魔理沙は、私の意思以外では口と脳以外
どこも動かないのよ！ それのどこが、私のモノじゃないっての？
！」

恐ろしく冷たい、だが怒りのこもっている声で、アリスはパチュ
リーを嘲る。

「・・・心が、魔理沙の心が貴女を求めているから。それは、身
体を支配するよりも、何倍も意味があるから」

「・・・何ですって？！ぶっ潰すわよ！」

「・・・やれるものならやってみなさいよ」

「微塵『エヴァ・ロット・サクリファイス』!」

ぎゅうん、と音を立てて来たのは、数百の人形。

「さあ、外に出ましよう、パチュリー・ノーレッジ」

人形が、パチュリーに襲い掛かる。

パチュリーはこれをデリユー・ジュフォーティディで相殺、セントエルモピラーで上空の人形も幾つか破壊。

「ただ人形が突っかかるだけのスペルじゃないのよ、これは」

勢いがなくなり、落ちている人形。

黒く焦げ、地面にはいつくばっている人形。

パチュリーが踏んでいるのもあった。

それら総てが、

「弾ける!人形達!」

紅蓮の輝きを持って、爆発した。

パチュリーは足に火傷を追い、吹き飛ぶ。

その落下地点にさらに爆発。キャミソールの背中が焦げる。

「く・・・!」

水の回復魔法で何とか傷を塞ぎ、立ち上がる。

人形の群れを見ると、少しも減っていない様子。むしろ、増えているような気もする。

「ふふふ、魔理沙、見て?貴女の大好きな子が、あんなにも無様な姿よ?」

「止める、止めてくれよ、アリス!一体、パチュリーが何をした?」

「あら、何を言っているの?貴女に、近寄った。それが、万死に値する事だつて、教えてあげなくちゃ」

再び、人形の群れがパチュリーに襲い掛かる。

「日符『ロイヤルフレア』・・・っ!」

火炎弾がパチュリーの頭上に出現し、破裂。

人形を一掃した。

「あら、やってくれるじゃないの」

一体だけ、人形が生き残っていた。

それが、不意に爆発した。

パチュリーの間合いには程遠いが、念のために二、三步後退した。そして、人形を見ると・・・

「これが、私の半力。蓬萊の、一歩手前くらいかしら」

増えている。それこそ一体が十八体ほどに。気持ち悪。

「嘘じゃないわよね・・・？」

「ええ、幻想じゃない、現実よ」

パチュリーのまわりに人形が円形に並ぶ。

一気に全員が突っ込む。

パチュリーがジェリーフィッシュプリンセスを出そうとしたときは、既に遅かった。

「あぐ・・・！」

パチュリーが見えなくなるほどの爆発。

「パチュリーいいいいっ！」

「くふふ、これでいい！ 魔理沙は、私のモノなのよ！」

「アリス、てめえっ！ この、絶対に許さないぜ！」

「・・・もう、魔理沙ってば嘘ばかり。完全に私のモノになれてとっても幸せそうよ？」

「これはお前がやってんだろ？！」

「これが魔理沙の本心なのよ。もう、私の魔法は貴女の心を綺麗にし始めてるのよ」

「綺麗に・・・？ どういうことだアリス？！」

「もう・・・わかってるくせに。パチュリーに侵されたその心を、私の魔法で元に戻してるんじゃないの。私のことが好きな、魔理沙に」

「・・・っ？！ 私は、そんなこと、お前のことなんて、前から好きじゃなかった・・・」

「違うつ！」

魔理沙の髪を引っ掴み、アリスは叫んだ。

「魔理沙は、ずっと私が、私だけが好きだったの！」

「私は、私は……！」

「……ま、魔理沙……！」

倒れたままだったパチュリーが、起き上がってきた。

「パチュリー！」

「生きていたの？しゅといわね……。でも。何度だって殺してあげるわ」

今度は紫色の人形を取り出す。

「さあ、やってしまいなさい、蓬萊」

「ホラーイ」

「待ってくれ、アリス！」

「なに？ 魔理沙」

「その……。頼む、私はどうなっても構わない！ だから、パチュリーは、パチュリーだけは殺さないでくれ……」

少女は、人形を操る手を下ろし、呟く。

「そう……。でも、その女の為に私のモノになるのは、なんだか癪よ……。そうだわ！」

ポン、と手を叩き、

「魔理沙、誓って。貴女は、私の永遠の人形で、私を永遠に愛する、従順な僕。もう、パチュリーを振り返らない。そう誓って。そうすれば、私はもうその魔女に用はないわ」

「……。魔理沙、駄目……。私はいから、お願い、そんなこと誓っちゃ駄目……」

パチュリーが止めたが、魔理沙は言葉を止めなかった。

「わかった。私は、お前の人形になる。パチュリーの事を、もう想わない……」

「『最後の誓い』は……。完成した。これで、心も身体も、魔理沙は私のモノ……！」

にやりと少女はある意では病的な笑みを浮かべ、指をクイ、と引いた。

「っんああああっ！」

魔理沙は身を弓なりにさせて、苦痛の表情を浮かべた。

「魔理沙っ！」

「あああああ、あっ！アリス・・・アリスうううっ！」

叫んだのは想い人ではなく、誓いを立てさせた魔法使い。

「魔理沙、どうしたの魔理沙！」

「ふふ、魔理沙は、私の魔法に、浄化されているの」

「あっ、アリス、体が、からだが、熱いよぉ・・・！」

その胸を押さえて、魔理沙は叫んでいる。

「誓いを立てたことで、少し魔理沙の心に『私に従う意思』が出来たの。そこをつてに、一気に心を私のモノにしたのよ。悔しいでしょう？私に、魔理沙をとられて。貴女も、レミリアの元でこうなれば幸せになれるのよ」

「そんな・・・」

「行きなさい、パチュリー。ここに、貴女は必要ない。むしろ有害。さあ、消えて」

「・・・魔理沙・・・魔理沙・・・」

「消えてって言うてるでしょ？！ 言うてることわかんないのっ？！」

人形が、パチュリーの肩を掴んで空へと導く。

「いや・・・魔理沙・・・こんなの・・・」

「そろそろ、浄化が終わる頃ね。さあ、もう見ないほうがいいわよ。もうとつくに涙で目の前など見えていない。

袖で目を押さえつつ、人形を払って空に飛びたって行く。

何も、考えていない。何も、考えられない。頭が、真っ白。

とりあえず、神社に戻ろう。そう、薄れる意識の中に浮かんだ。

小一時間前に時計を戻そう。

博麗神社に、一匹の妖怪が現れた。

あまりにも厚く衣を着込んでいるので、その人相すらわからない。ただ、体格は幼く小さい。分厚い、太陽を遮る衣はあまりにも不似合いである。

そして、そのフードから僅かに覗くその瞳は、深紅。

「・・・レミリア・・・何しに来たの」

目の前にいた霊夢は、震撼した。その威圧感に、殺気に、少し吐き気すら催した。

「解ってるくせに・・・霊夢、パチュリーが此処に来なかった？」

「・・・どうして？」

「ふふ、いたのね。・・・そうねえ、今朝の・・・巳から午つてところかしら。出て行ったのはついさっきね？」

「・・・昨日から私一人だったけど・・・。どうしてあんなのが家にいると思うのよ」

レミリアはすう、と息を吸い、

「まだ、パチエの匂いがする。そうねえ、フランもいるんでしょう？日陰に」

「・・・何を言っているの・・・」

「とぼけても無駄。霊夢・・・『フランとパチエの居場所を教えなさい』」

深紅の目が輝きを増す。

レミリアの『魅了の魔眼』である。

「・・・パチュリーはアリスの家に・・・フランドールは地下室に・・・」

「『地下室まで案内なさい』」

「わかったわ・・・」

『魅了の魔眼』で操作されて、霊夢はレミリアをフランドールの隠れている地下室に連れて行った。

ギィ、と鉄の扉が音を立てて開き、ややめに明るい地下室に、外の

光が少し入り込んだ。

「霊夢、どうしたの？」

疑うこともなくフランドールは扉を見る。

そこにいたのは、霊夢だけではない。

「こんなところに逃げ込んで・・・フ란のおばかさん」

フードをとり、レミリアは顔を見せた。

「く・・・お姉様、どうして此処が・・・」

「貴女もやっただしょう？チルノとルーミアに」

隣で虚ろな目をしている霊夢の肩に手を置き、自分の目の指差す。

「・・・！」

「あの二人にだけ『魔眼』をかけたのが失敗だったわね。湖を越えて神社に行った、ってすぐわかつちゃうわよ」

にま、と歪んだ笑いを浮かべてレミリアは言葉を紡ぐ。

「パチエの脱出、貴女が手伝ったんでしょう？」

「てことは・・・子悪魔に何かしたでしょ、お姉様」

「ええ、ちよつと脱出方法を教えてもらってから、咲夜に処理を任せたわ」

「処理って・・・殺させるつもり？！」

「大げさね。私が再召喚するつもりだから大丈夫よ」

「お姉様が主になっちゃうじゃないの、それだと」

「それが狙いなよ。わからない訳じゃないでしょう？」

「・・・で、私をどうするつもり？殺す？まあ、無理だろうけど」

「・・・じゃあ、これならどう？」

取り出したのは、銀色に輝く銃。微かだが、吸血鬼の忌み嫌う『洗礼の純銀』と太陽の魔法の存在を感じる。

「パチエの魔導書を参考に作ったの。『洗礼の純銀』なんて私が触ったら瞬く間に手が消えちゃうし、太陽の魔法なんて式書くだけで精一杯よ。だから、ほとんど子悪魔にさせたのよ」

「・・・皮肉な話・・・。そんなのが私に通用するとでも？」

「ええ、子悪魔の持っている生命維持に必要な最低限の魔力以外全

てこれに注ぎ込んだもの、これで出来ないわけがないわ」

レミリアは銃を構え、その銃口を自らの義理とはいえ別の意味で血が繋がっている妹に向けている。

「・・・姉に殺される気分はどう？」

「あんまり、悪くない。だって、今のお姉様、いつもと違うもん。おかしいから、私を殺そうとするんでしょう・・・？」

「・・・確かに、可笑しいわね。笑える。貴女のその態度、言動、どう見ても時間稼ぎ。そう、『魔眼』が切れるまでの時間稼ぎにしか思えないのよ・・・」

くすくすと笑い、レミリアは引き金を引く。

「霊夢、今！」

「神技『八方鬼縛陣』！」

「なっ、霊夢、いつの間に！」

橙色の光に弾丸が弾かれ、同時にレミリアの動きを封じる。

「禁忌『レーヴァテイン』！」

炎の渦を急速に集め、一振りの剣とする。

フランドールはそれを振りぬぎ、レミリアの身を斬る。

「がっ・・・かは・・・！」

真つ二つになったレミリア。

だが、吸血鬼はこの程度で死にはしない。

「霊夢、まだ来る！」

「わぁってるわよ！」

上半身と下半身、二つの断面に血色の魔法陣が奔る。

そして消えるは、上半身。魔法陣のある断面を繋ぐかのように、下半身とくっつく。

「神槍『スピア・ザ・グングニル』！」

放たれる槍。真紅に輝くその魔力の結晶が、見るものを圧倒する。

「神霊『夢想封印』！」

「禁忌『クランベリートラップ』！」

白紅青緑、光り輝く大弾小弾。グングニルは貫通するが、むしろそ

れは目的ではない。

難なくフランドールに放たれた槍はかわされ、レミリアのまわりには迫り来る弾丸のみ。

「・・・霊撃！」

「なっ?!」

それを消し去り、レミリアは一步後退。

「貴女から奪っておいてよかったわ・・・『霊撃・巫女用第二試作型』」

「いつの・・・まに・・・っ」

「いつですって？貴女が『魔眼』で意識を乗っ取られてる間に決まってるじゃない」

レミリアはさらに後退し、扉の外へ出た。

「さようなら、霊夢、フラン。誰かが気づけば、また会いましょう」

「ちょ、ちよつとレミリア！待ちなさいよ！」

「・・・く、禁忌『カゴメカゴメ』！」

扉を閉じようとしていたレミリアに、フランドールは弾幕で囲みこむ。

「無駄無駄無駄あ。フランの弾幕なんかじゃ、私は止められないよ？」

縮まっていた霊撃が再び展開され、緑色の弾丸はおろか、次に放たれた黄色い大弾も全て消滅した。

「警醒陣！」

「ふふ、これはグレイズすれば問題ないわね」

吸血鬼特有の変わった動きで、霊夢の札での結界も消滅。

扉は閉められ、その後に深紅の魔法陣が張られた。

「ま、まさか・・・」

霊夢がガチャガチャと扉のノブを回すも、回るだけでドアが引けない。

「無駄よ、霊夢。お姉様は、魔法のエキスパート。ちよつとやさそつとじゃ開かないよ・・・」

「じゃあ、ちよつとやそつとじゃなければいいのよね・・・神技『天覇風神脚』！」

多量の霊力の乗ったサマーソルトキックを起点に、五回六回と蹴りを扉に入れていく。

だが当然、レミリアの封印がこの程度で壊れるはずもなく。

「なっ・・・そんな」

「ね、言っただでしょ？もう、パチュリーの助けを待つしかないよ・・・」

フランドールはとうに諦めた様子。

「ちい、あんまり待つのも泣き寝入りするのも好きじゃないけど・・・この現状じゃどうしようもないわね」

おとなしく待つ事を決めた霊夢。顰め面で、胡坐をかくその姿は、巫女というより鬼神の子。怒ってこそいるが、その気迫はさほど激しいものではない。

それを見たフランドールは、

「さて、それまでに何とかして脱出しないと・・・」

「出来ないんじゃないの？」

「扉は開かないよ？でも、この岩を組み上げた壁なら、壊せるでしょ？」

「はあ！？ そんなことしたら、神社の床が・・・」

「飢え死にとどっちがいい？」

「・・・仕方ないわねえ・・・。後でこの地下室は、埋めるわよ」

「お好きにどうぞ。・・・禁忌『レーヴァテイン』！」

「全く・・・霊符『夢想封印 集』！」

壁に向けて、脱出の望みをかけて、二人はスペルを放った。

後日談／after event:second day 2 (前書き)

二日目、後編です。

パチエがいろんなことに、疲れちゃいます。

ついでに、アリスが魔理沙をモノにしちゃいます。

後日談　a f t e r　e v e n t : s e c o n d　d a y　2

パチュリー・ノーレッジは、ただひたすらに飛んだ。
匿ってくれている者の待つ、博麗神社へと。

言葉も出さない。

発作も、全く起きない。

ただ、夢中だった。恐怖から逃げたかった。

（嫌・・・魔理沙・・・どうして・・・）

神社が見えてくると、少し落ち着いた。

そして地面に降り立つと、待つ者の名を叫んだ。

「霊夢　！どこー！？」

あたりを見回すが、姿どころか気配すらしない。

「霊夢　っ！どこにいるの！」

「・・・あら、霊夢はここにはいなくてよ」

「！！！」

戦慄。恐怖。驚愕。

背後の声に、気配に、殺気に、ありとあらゆる驚きと恐れの言葉を詰め込んでも足りないほど、パチュリーは震えた。

「・・・今からアリスのところに行こうかと思ったんだけど・・・
入れ違いにならなくてよかったわ」

「・・・・・・・・」

ぱくぱくと口を動かすも、声が出ない。

いや、出してはいけないと本能が告げている。

「私は別に怒ってないから、さあ、帰りましょう？」

猫撫で声。ただし、狂的な。

『帰る』というのは、『紅魔館に戻る』ということ。

許せなかった。パチュリーは、自分の居場所は、魔理沙の家の図書館と決めていたから。

だからこそ、『レミリアもパチュリーも帰る場所は紅魔館』という定式が気に食わなくて、口を突いて言葉が紡がれた。

「・・・いいえ。私の帰る家は、今は・・・魔理沙の家よ」

「・・・貴女は見たんでしょう？魔理沙の、アリスに染まって行く姿を」

振り返ると、レミリアは深く厚く衣を身に着け、その身を太陽から守っていた。

「でも、あれは魔理沙の本心じゃない。だからこそ、魔理沙は魔法で強制されるしかなかった」

「事实は、魔理沙はもうアリスのモノ。その真実は、誰も変えられない。たとえ、貴女の愛でも」

「いいえ、魔法はかけるだけじゃない。解くものでもあるのよ」

「・・・無駄よ。そんなことして、あのアリスが許すわけじゃない。私は、あいつの恐ろしさを身をもって知ったもの。だから、そんなことしないで、私のところに・・・」

「嫌よ。無駄かどうか、やってみなきゃわかんないじゃないの。私に、出来ない魔法はないわ」

「それを言うなら、私もそうよ。何度解かれても、私とアリスで修復するから。無駄なのよ」

「いいわよ、『どんなことでも、とりあえずやるときゃいいぜ。何も得なくても、先にある成功だけ見てやってりゃ、何とかなるぜ』って、魔理沙は言ってたもの。だから、一度っきりの賭けでも、全力を賭してやってみる価値はある」

パチュリーの、レミリアと向き合うその姿は、数日前の魔理沙と重なる。

レミリアはそれに魔理沙がパチュリーを連れ出した記憶がフラッシュバックし、

「・・・あんなの！パチエなんかとつりあう筈ないのよ！それがどうしてわかんないの?!」

気づけば、レミリアは怒号を発していた。

「つりあうかどうかは、私が決めるのよ。わかっていないのは、貴女じゃないの」

「違う！私は、私はただパチエと一緒にいたいのに！パチエにこつちを向いて欲しいの！魔理沙なんかより、私の方が何倍も何倍も貴女に尽くせるのに！」

「違うの、レミイ。私は、尽くしてくれる人が好きになるわけじゃない。魔理沙が、魔理沙だから好きになったの。だから、そんなことは何の関係もないの」

「じゃあ、どうすればこつちを向いてくれるの？！どうして、魔理沙なの？！いままで、同じ屋敷に住んでいたのに、ちつともまともに話を聞いてくれなかったじゃないの！」

「?!」

パチュリーは、少し驚いた。いや、少しではない。といって、多大というほどでもない。

まともに話を聞いてない？

そんなわけじゃないの。

貴女が居る間、私は読んでいた本を閉じて貴女の話に耳を傾けてたのよ？

忘れちゃったの？吸血鬼異変の時も、私にいろいろ話してくれたじゃないの。

今日は、何人しもべにしたのよ、って嬉しそうにくるくる踊りながら、言っていたじゃないの。

そんなことも、覚えていないの？

ねえ、レミイ、貴女は、どうしちゃったの

？

「レミイ。どうしてなの？」

「・・・なにが」

「本当に、私が貴女の話聞いていないと思っっているの？」

「私がいる間も、ずっと本を読んで、相槌くらいしか打ってなかっ

たじゃないの！」

「・・・そう、わかったわ。貴女は、覚えていないのね」
「だから、何を!？」

パチュリーは応えず、一枚の札を取り出した。

「私、やっぱり貴女のところにはいけないわ。・・・貴方を救う手立てを、考えなくちゃ」

「ま、待つてパチエ！ 待ちなさいよ！ どこに行くつもり?!」

「どこでもいいでしょ。貴女は、私が貴女にしてきたことを、何も覚えていないのだから」

魔法陣が現れた直後、パチュリーの姿は消えていた。

「・・・どこに消えたのかしら」

レミリアが魔法陣のあった場所を探知魔法に行き先を探らせる。

「・・・なによ、わからないじゃないの・・・どうしたのよ、私は・・・」

だんだんと苛々してきたレミリア。探知魔法式をどんどん打ち込んでいく。

「・・・形跡が残らないようにしてある?! ふざけないでッ！
パチエがそんな高度な魔法を瞬間的に作れるわけないんだから！
もつとくまなく探しなさい！」

魔法式に怒鳴り、怒りの抛り所を求めた。

ストレスは軽減されるわけもなく、ただ足先でとんとん地面を叩いているだけだったのが地面を蹴り、決り始めた。

「・・・スペルカードの効果で形跡は消されている・・・ですって?! パチエ・・・何でそこまで私を嫌いになったの?! 貴女を思う気持ちは、今誰よりも強いはずなのに！」

最終的にはしゃがみこんで地面を殴る始末。

「やっとパチエを見つけたと思ったのに・・・！ やつと私を見てくれると思ったのに・・・！ どうして?! 私の何が、いけなかったっていうの?!」

そう叫んでいると、

「煩いわね。どうしたのレミリア」

箒に乗った魔理沙の後ろから、アリスはレミリアに声をかけた。

「・・・パチエが、痕跡も無しに消えたのよ・・・」

「それくらいで、何大声出してんの？どこにいるかくらい、予想がつくでしょう？」

「・・・わからないから、こつやって魔法を使っているんでしょう？！」

「あいつの帰る場所は・・・もう、一つしかないわよ」

「・・・どこよ」

「そんなこともわからないの？・・・魔理沙の家よ」

「！！　そうだったわ！」

「莫迦が。パチュリーの事を、心で理解しようとしなないその態度が、嫌われたんじゃないの？」

「そんなことは些細などうでもいいことよ！　アリス、手伝って！　一緒に行くわよ！」

「・・・はいはい。魔理沙、貴女の家へ向かって頂戴」

「・・・・・・」

黒い蝙蝠の翼を広げ、飛び立つレミリア。

それに続いて、箒に乗った魔理沙とアリスも空へと舞い上がる。

「ああ・・・魔理沙。私の可愛い、お人形・・・」

「・・・・・・」

アリスが恍惚の表情を浮かべ、後ろから魔理沙の頬を撫でる。

だが、魔理沙は何の反応もなく、ひたすらレミリアについていく。

その瞳に、光はなかった。その顔に、以前の魔理沙の面影など微塵もなかった。

顔つきは以前と同じ。ただ、表情がない。

そう、ただ、操られるのみの、人形のように

レミリアの予想通り、パチュリーは魔理沙の家に立て籠もってい

た。

ただそこにいるだけでは、すぐにばれてしまうと考え、パチュリーは暗記している魔道書の防御陣系魔法を、できるだけ複合させて張った。

「一応、魔力の源泉は紅魔館の『空間制御機』にしてあるけど・・・どれくらい持つか・・・」

空間制御機とは、咲夜の力だけでは支えきれなくなった空間の広い紅魔館を、広げた状態で安定させるためのマジックアイテム。ほぼ無尽蔵に魔力が湧くので、結界の源泉に使った。

「つと、こんなことをしている場合じゃない」

魔法式を自分の図書館の床に書きこむ。

「ここが・・・こうなって・・・この複合で・・・自己再生・・・あ、ここに「未」^{ひつじ}も・・・」

複雑怪奇、どうやら何かを作り出す魔術式らしい。

描き上げると、

「・・・魔法で描けばよかったような・・・」

ポツリと呟いた。

「あとは、魔法土ね・・・土符『ゴーレムマッド』！」

床に敷かれている白い布の上に、魔力の籠った泥土が積もる。

「次は・・・明日にしましょうか」

そして、魔理沙の蒐集品の一つ『スケルトンコート』・・・いつてしまえば『透明マント』の類・・・を身に纏い、外に出てみた。

「まだ、来てはいないようね・・・」

パチュリーが辺りを見回すが、まだレミリアたちの姿はない。だが、もう気づいているはず。

戻れる場所は、最後の砦は、この魔理沙の家だけだと。

現に、先程通告同然の発言をしてきたから。

ふと上を見れば、すぐそこに迫るものが。

「・・・来たわね・・・」

結界の内側に入り込み、様子を見る。

「あら、魔理沙の家はどこ？」

「ここにあるはずだけど・・・」

まず、パチュリーは視覚での隠匿に掛かる。

「魔法で結界が張られてるのよ。だから、私達に見えないんじゃないかしら」

「ああ、そうなの。気づかなかった・・・さすが、魔神の血筋かしらね？」

「知らないわよ・・・魔符『アーティフルサクリファイス』！」

アリスが、人形を投げて結界の強度を打診する。

「・・・なるほど。まんざら壊せなくもないわね・・・」

「そうかしら。ちよつと、手間が多い気がするけど」

（・・・私の結界、そう易々と破られてたまるもんですか）

「へえ・・・なるほど。神槍『スピア・ザ・グングニル』！」

今度は、レミリアがグングニルを放つ。

結界に微塵も揺らぎは出ずに、それは崩壊、消滅した。

「一応、視覚隠蔽は解除しておく？」

「そうね、私、まだ式を見てないからちよつと出来ないのよね」

「わかったわ。・・・流石の天才もこればかりはお手上げ、といったところかしら」

「いいから早くやりなさい」

アリスが、人形を結界のところどころに、合計6体配置した。

それを結ぶように六角と円形の魔法式が立ち上がる。

「西に英知を、北に力を、東に華を、南に命を。我が声に応えて来たれ・・・光の精！」

形成された魔法陣の中心に、純白の光が差し込む。

「我が眼を惑わす混沌を、その力を以って掃え！」

光が、結界にそって広がり、視覚隠蔽を溶かす。

「わお・・・精霊召喚なんて、やるじゃないの」

「まあね。それでも生粋の魔法使いよ」

光が消滅し、魔理沙の家があらわになる。

「よっ、と」

アリスが弾幕を放つ。

電撃の走るような『ばりばりっ』という音と共に弾幕は消滅する。

「強度に変化なし。召喚術で疲れたから、私はもう帰るわよ」

「あらそう。じゃあ、私も戻ろうかしら」

「お好きにどうぞ。じゃあ、魔理沙。家へ帰りましょうか」

魔理沙が無表情のまま、木陰から出てくる。

パチュリーは、それを見て唐突に自己嫌悪に陥る。

（あの時、私が逃げてなかったら・・・こうはならなかったのかしら・・・いいえ、きっとさせなかった。あの時、私が人形を振りほどいても魔理沙を助けに行ってたら・・・）

アリスを箒の後ろに乗せ、空へとのぼる魔理沙の姿を、パチュリーはただ見続けることしか出来なかった。

後日談／after event:second day 2(後書き)

もう・・・話題が・・・ない・・・。

あ、PSP買いましたけど、親が奪いました。
畜生。

後日談／after event: last day (前書き)

さて、今回はぱちゅコン出てきちゃいます。

ただ、髪の毛は無理があるのでちよつとご都合です。

まあ、そのほかはとりあえず放置と言つことで。

後日談　a f t e r　e v e n t : l a s t　d a y

次の日、パチュリーはある転移魔法を施行した。

その魔法とは、まさしくワープ。図書館と他の場所を魔法でリンクさせる荒業な魔法。

リスクが伴うが、今は悠長なことを言っていられない。

下手をすれば時空間の境界に落ちる可能性もある。しかし、事態は一刻を争う。

もしここから出入りしていたら、何かに勘付かれる可能性もある。レミリアやアリスが、ここを出た瞬間襲ってくる可能性もある。

だが、この転移を使えば、ばったり出くわさない限り、そのような心配はない。

この結界も、持ってあと一日と数時間。

空間制御機から魔力を吸っているとなれば、レミリアはおそらく空間を縮めてでも機能を停止する。

それまでに、パチュリーは図書館を・・・否、魔理沙の家を守る戦力が必要だった。

ここは、いわば魔理沙とパチュリーの・・・少なくとも魔理沙の、居場所。

（なら、守らなきゃ駄目でしょ！ー！）

そこで思いついた案が、「自己意思隔離型泥人形」。

本当は髪の毛が必要なのだが、研究途中でつぶれた『大気中に漂う魔力』を使って作る泥人形を早急に完成させた。

実際にその場所に少しでも目的の人物の魔力が残っていれば、その魔力の統合情報を、細胞分裂によく似た作用で増幅させ、泥人形にその人物の能力を行使させることが出来る。

まず、霧雨邸で『魔理沙』を前日描いていた自動生産魔法にかけ、神社で『霊夢』と『フランドール』の魔力を回収、そして紅魔館と

マーガトロイド邸で『アリス』、『レミリア』、『咲夜』、『美鈴』、の魔力を回収。この後者二つは、ほとんど賭け。だが、これだけの戦力がなければ、おそらく結界と同等に霧雨邸を護るのはおそらく不可能。

『魔理沙を、あの時救えなかった大好きな人を、今度こそ救ってみせる』

それが、パチュリーの行動の根底。それだけが危険な賭けも分の悪い戦も、全て覆す自身の根源。もう、この紫色の魔女の瞳に、恐れなど微塵も存在していないのだ。

「目覚めて、七曜の精霊たち。この、パチュリー・ノーレッジに力を貸して。私を、博麗神社の境内へ連れて行って」

魔理沙の家の一室、床に壁に天井に白い魔法陣の線が奔る。輝きが増したと思えば、そこにパチュリーの姿はなかった。

空間が某妖怪の隙間の如し開いて、そこからパチュリーは現れた。

「どうかしら・・・『マジックキャプチャ フランドール・スカーレット、博麗 霊夢！』」

札を取り出し、そこに魔力があるかどうかさがす。

「あら、この魔力の反応は・・・『二人とも今この辺で魔法を行使している』？」

パチュリーが神社の中にはいると、濃密な魔力にむせ返った。

魔法使いと言うのは、大気中の魔力の濃さが異常だと身体に異変が起こるという。

パチュリーの場合、持病の喘息が発作を起こす。

「ごほ、げほっ・・・何、この魔力・・・」

パチュリーは、二人の魔力のサンプルを一応とり、神社の中を見回る。

その中でも一層、魔力が濃く、地面の揺れの激しい場所がある。

「く・・・」

流石に絶えかねたのか、パチュリーは小さく自分の魔力圏を作り出す。

自分に適度な濃度の魔力を撒布し、発作を押さえる。

「あら、なにこれ」

畳をめくった痕跡がある。これはすなわち、地下に何かあるということ。

「えっと・・・本を動かすときの感触でいいのよね・・・」
魔法で、畳を浮かせる。

「・・・くっ・・・想像以上に重い・・・」

そしてすぐに、横に投げた。

「予想通り。地下に階段み・・・」

そこまで言っていると、

「宝具『陰陽鬼神玉』！」

「禁忌『レーヴァテイン』！」

数尺先の床が、砕けた。

そして、崩れ落ちた。

「急いで、霊夢！」

「わかってるわよ！」

パチュリーは幾らか後退する。

そして、パチュリーのいた場所に、二人の少女が現れた。

「・・・間、一髪・・・」

「危なかったー」

「・・・あ、貴女たち・・・どうして・・・」

「あ、図書館ニート」

「聞いてー、パチュリー。お姉様が閉じ込めたの。酷いよねー、妹を閉じ込めるなんてさ。それでね、天井破壊してやっと脱出できたの」

「そう・・・。ねえ、ちょっと手伝って欲しいことがあるんだけど」
「何？」

「何でも、とはいかないけど、魔理沙のための手伝いならある程度

やるわよ」

「あのね、ゴーレムって知ってるでしょ？」

「ああ、あの作られた目的が戦争の土人形でしょう？」

「ええ、その土人形を・・・」

そこまで言ったところで、壁が吹き飛ぶ。

「っ?! もう、気づかれた?!」

パチュリーは霊夢とフランドールの至近距離に飛び退く。

そして、ごく小さい声で、

（私に掴まって。魔理沙の家に転移するから）

と呟いた。

「もう、脱出しちゃったの？ それに、パチエもいるし。どういうわけよ、これ？」

「・・・レミイ、私と出会ったあの時のこと、覚えてる？」

「ええ、そんなの、忘れるわけ・・・。あ、あれ？」

「思い出せないでしょう？じゃあ、私の血を吸おうとしたときのこと、覚えてる？」

「そんなこと・・・あったかしら・・・？」

「そうでしょうね。じゃあ、吸血鬼異変の時、貴女は私にどんなことをしゃべっていたか、覚えてない？」

「あの時は、夢中だったから記憶なんて・・・」

「やっぱり。貴女も、アリスも、『最終段階』まで来てる・・・

もう、自分だけではどうにもならない。みんな、私の所為なのかもしれないわね」

「そんな、パチエの所為なんかじゃ・・・」

「寄らないで。私、まだやらなくちゃいけないことがあるの。私を、本気でさらいたいのなら、思い出してきなさい。私の、魔理沙への想いに、打ち勝ってみせなさい。それができないようなら、私は貴女と共に生きられない」

あえて、パチュリーはレミリアに望みありな言葉をかけ、『明日、霧雨邸に来るように』仕向けている。

全ては、レミリアと、アリスを救うため。

魔理沙だけ救えばそれでいいとは、彼女には思えなかったのだ。
アリスとはたとえどれほど関係が薄くとも、魔理沙の友人なら尚更に。

レミリアは、言うまでもなく彼女の親友だ。助けるのに理由など無粋。

「な、何をいつているの？ 私は、ただパチエを魔理沙から守りたかっただけ……」

「ここまで来ると……もう何をいつているのかすら私には理解できない。魔理沙が、一体何をしたというの？ 私が魔理沙と行くことを選んだのよ」

「嘘でしょ?! パチエが、そんな、私を裏切ったり……」

「レミイ、私は、貴女を裏切ったつもりはないわ。私は、ただ魔理沙が好きだっただけ」

「……嘘! パチエは、今の魔理沙みたいに、操られてるのよ! 私が行かないでって言ったのに、パチエが行く訳ないもん!」

「私は私の意思で動いているの、貴女の言うことだけで止めたりしないわ。……魔理沙の事なら、尚更……」

パチュリーがそう言うと、彼女を中心にして水色の空間がフランドールと霊夢も包む。

「どこにも行かせたりしない!」

「フランドール」

「う、うん! 禁忌『恋の迷路』……!」

足止めしろ、と言う指示を理解し、フランドールは弾幕を放つ。逃げ口を完全に塞いだ「恋の迷路」は、かわすだけで精一杯の威圧を持っている。

「く……フラン、止めなさい!」

「ごめんね……お姉様……」

フランドールが、レミリアから目をそむける。

水色の空間が光を増す。

そして、弾けた直後に三人は消えた。

「・・・パチエ・・・一体・・・どうしたの・・・？」

レミリアには見えていなかった。

パチュリーの言動が意味する、真意が。

ただ、レミリアは全てを誤っていたのだ。

方法も、目的も、パチュリーの状態も。

狂気に吞まれていて、全てあやふやなままでことを進めていたから。理由も、行動の結果も、後からついてきたものばかりだった。

それを直視せずに進んできた結果。

その結果の内の一つがパチュリーを、悲しませた。

それが、何よりもレミリアにとって痛手だった。

「ねえ、私は、どうすればよかったの？」

霧雨邸で、パチュリーは霊夢とフランドールに、同じく二人の土人形を作りつつ事態の説明を行う。

「ねえ、お姉様がどうしてあんなったのか、パチュリーは知ってるの？」

「ええ・・・あれは、フランドールも以前かかったことがある『吸血鬼の狂気』ヴァンパイアフランティックという吸血鬼なら誰でも一度はかかる病気のようなものなの」

「・・・私の、閉じ込められた理由が、それ？」

「そうね」

「・・・病気って、まあ確かにあれは病的だけど・・・」

「レミィは、私が魔理沙と暮らすってわかった時に、発症したんだと思う。あのね、『吸血鬼の狂気』には五段階くらいあって、レミィとアリスは両方第五段階なんだと思う」

「何でアリスが出てくんのよ、吸血鬼じゃないのに」

「あのね、『吸血鬼の狂気』にかかっている間、『狂眼』っていう特殊な『魔眼』も使えるようになるの。『狂眼』は、かけられた理性を持つ人間の、『これをしてほしいけど許されるわけがない、あの人が

喜ぶわけがない』といった理性のたがで制御されてる欲望を解放つ力があつて、それに併せて『吸血鬼の狂気』に似た段階性の狂気で心を満たすのよ」

「・・・だったら、アリスは『魔理沙を自分の人形にしたい』って思つてたわけ？」

「・・・何でそれを知つてるのよ」

「転移中にあんたの記憶の一部を見た。さ、続けて続けて」

「・・・何それ・・・。まあ、もちろん、そんな感情がなかったわけじゃないでしょうね。でも、そんなことをして霊夢や私が黙っていない、それに魔理沙がそんなことで喜ぶはずがないってわかつてたから、しなかった」

「でも・・・今は、アリスは魔理沙を操つて魔理沙を無理やり喜ばせて、それをアリスは魔理沙自身の意味として扱つてるってことかしら」

「最後まで抵抗した証、かしらね。魔理沙は、今は操られるだけの人形よ。本来なら、アリスの人形達のように擬似人格が埋め込まれていた筈ね」

「擬似人格を、魔理沙が受け入れなかったわけね」

「そうなるわね・・・」

「何嬉しそうな。ムカツク」

「ご、ごめんなさい」

「『吸血鬼の狂気』の説明を続けて、パチュリー。私、もっと知りたい」

「そうね。まず、第一段階で『あれをしておけばよかった』と自責や後悔の念に苛まれるの。第二段階で、『まだ遅くはないはず、まだ何か方法はある』と妙な画策をめくらせ始める。第三段階で、狂気が目覚め始めるわけ。無意味な破壊衝動に襲われて、目の前にあるもの何でも壊したくなるの」

「あの時の私みたいね」

「ええ、貴女は、『アル』が死んで『私が後一日いたら』なんて後

悔して、『全部壊せばみんな助かる』と思い込んだからその村を破壊したんだと思う」

「・・・そう・・・あの村、やっぱり壊れちゃったんだよね・・・」
「・・・で、第四段階になると異常な思い込みが出てくるの。アリスみたいな、『魔理沙は自分のことが前から好きだった』なんてのもそのうちね。で、第五段階になると記憶の欠如、改ざん、力に制御がからなくなつて、自分の目的にどうこう言われると急に怒り出すようになるの」

「へえ・・・だからお姉様は、パチエと初めてあつたときのこととか覚えてなかつたんだね」

「ええ・・・」

パチュリーは、「これくらいが『吸血鬼の狂気』の特徴かしら」と呟き、転移魔法陣のある部屋の扉を開く。

「ちよつと私、これから紅魔館に魔力を集めに行つて来る。貴女達は、土人形に魔力を送り続けてて」

「はいはい、わかりましたよ」

「任せて！」

そして扉を閉めた。

光が扉から漏れ、転移魔法が発動。パチュリーは、紅魔館に去つていった。

再び某スキマ妖怪の要領で空間が裂け、パチュリーは紅魔館に現れた。

「・・・この庭なら、全員分の魔力が採取できるかしら」

「あら、パチュリー様」

「！！！」

後ろに立っていたのは、メイド長。

「・・・私をどうにかしようと言つのなら、話を聞いてからでも遅くないわよ」

「いいえ、私はそんなつもりはありません。今のお嬢様は、『吸血

鬼の狂気』にかかっていらつしやいますから」

「知っていたのね、咲夜。レミイは最終段階まで来てるわよ」

「知っています。あと、私は、お嬢様に言われなければ『空間制御機』は停止するつもりはありません」

「もうそこまでばれていたの。意外だったわ・・・」

「もうすぐお嬢様がお帰りになられます、早く去ったほうがよろしいのでは？」

「そうね・・・」

パチュリーは、三本の瓶に『咲夜』『レミリア』『美鈴』の魔力を詰め、カードを取り出す。

「・・・貴女も、私と来ない？」

「折角ですが、遠慮させていただきます。私がいなくなつては、お嬢様の心の寄りどころがなくなつてしまいますから」

「そう。じゃあ、気が向いたら魔理沙の家に来て。私は、レミイも助けたいの」

魔法陣が展開され、陣の沿革にそつてパチュリーのまわりが純白の光を放つ。

「・・・ご武運を祈っております。お氣をつけて。・・・パチュリー様」

「さよなら、咲夜」

咲夜が深く辞儀をし、パチュリーは消えた。

「・・・どうか、お嬢様を助けてあげてくださいね・・・」

「・・・はい、これ。『美鈴』『咲夜』『レミリア』の魔力。じゃあよろしく。私はちよつとアリスのところに行つて来るわ」

「・・・またどこかに行くの？いい加減こつちも手伝いなさいよ」

「もう日が沈みかけてるの。急いで行かなくちゃ・・・」

そして、パチュリーはマーガトロイド邸へ向かった。

要領に則つてスキマ老婆（ピチューン）・・・ゲフンゴフン、境

界に潜む妖怪のように華麗に空間を開き現れる。

「ここは流石に急いでおかないと・・・」

「何を急ぐのかしら？」

「魔力の収集。レミイに対抗する戦力が必要なのよ」

と言いつつ、アリスの魔力を瓶に詰めた。

「ふうん・・・」

パチュリーはアリスが後ろにいることに、全く気づいていない・

「貴女には関係ないし、後一分で帰るわ」

「そう言うわけでもないのよ」

わけではないようだ。

「よし終わった。じゃあ、またねアリス」

「恋敵をそう易々と逃がすと思う？」

「・・・さあね」

「魔理沙、マジックナパーム！」

「・・・」

後ろから現れた魔理沙が、接触爆発性の魔力を放つ。

「皮肉はいいから、邪魔しないで」

「そっちこそ、魔理沙を私からとろうとしておいて。とりあえず二

〜三回死んどきなさい」

パチュリーがくるりとかわし、魔理沙に超至近距離状態をとる。

「魔理沙・・・」

「・・・う・・・」

魔理沙に、パチュリーはすねた表情を見せる。パチュリーの表情の中でも、これはレミリアたちに「ぐつと来る」と評価を得ている表情。

僅かに術に揺れが生じる。

それを見計らって、魔理沙の両肩を掴む。

「んっ・・・」

魔理沙への、唐突なキス。

「

!!」

アリス、驚愕。

魔理沙は、少々目を見開いているが、大した驚きはないように見える。

「な、ななっ!! あんた、何やってんの?! ちょっと、ねえ、聞いてる?!」

「ふふ・・・私が魔理沙に手を出しちゃ駄目なんて誰もいつてないわよ」

「私が言ってるわよ!」

「そう・・・知らないわよ」

挑発的な態度。

これは、一つの作戦。

まず、魔理沙にかかっている術をキスや言葉に込めた魔法で軽減し、解除を促す。

そして、アリスに積極的な報復の意識を持たせる。

そうすることによって、アリスとレミリアと魔理沙、全員の救済を一度に行うつもりである。

そして魔理沙から手を離し、カードを使って霧雨邸へ飛んだ。

「ちょ、ちよっと待ちなさいよ

!!!」

「ふう・・・ちよっと疲れたわ」

「あ、帰ってきた。で? どうだった、魔理沙とアリスの様子は」

「え? あ、まあ、一応、魔理沙の魔法の対除セキュリティはほとんど解除したわ。後、アリスは明日、確実に来るように促した。一応、計画は安定したわね」

「ほら、魔力をこつちへよこしなさい。『土人形』、作るんでしょ?」

「ええ、お願い。私は、結界の外あたりに『土人形』を復活させるための魔法陣を書いてくる」

「へえ・・・もう、凄い数なんだけど。特に魔理沙とかあんたとか」
「それでいいの。レミイたちには、きつとどれだけいても足りないから」

「これは・・・ちょっと気味が悪いかも・・・流石に」

「うん・・・そうだね・・・」

「そこは否定しないわ。身長的にグングニルを守るには原寸大である必要があっただけ」

・・・そう。

パチュリーの造った『土人形』は、その魔力を持つものの姿をそっくりそのままミラーしたもの。以前造った『土人形』は、半分程度だったが、今回は相手が相手なので、原寸大に増幅するしかなかったようだ。

「・・・あ、そうだ。・・・あの式を組み込んで・・・二重回路を生成して・・・」

呟きながら、パチュリーは外に出て行った。

後日談／after event：last day（後書き）

クロックタワーをやりましょう。

私は、とりあえずもう少しで始めます。

後日談 〉 a f t e r e v e n t : l a s t d a y 2 (前書き)

三日目。前のお話は、巳の刻(昼十時) 〉 申の刻(夜六時) くらいです。

そのお話の、卯の刻(朝六時) 〉 卯の一つ(六時半) くらいと、クライマックスの皮切りにあたる子の刻(夜の十二時) くらいの話を載せました。

後日談　after event：last day 2

三日前。魔理沙とパチュリーが強奪される前日。

場所はマーガトロイド邸。夜の出来事。

「さて、そろそろ人形を作り始めないと・・・」

アリス・マーガトロイドは、いつものように攻撃用人形の作成にとりかかろうとしていた。

そこに、訪問者を継げるベル。

「こんな時間に・・・って、もう宵の子（零時程）？」

扉を開くと、そこにいたのは幼い少女。自分より幾らか背が低いので、多少見下ろすことになる。

「あら、レミリア。どうしたの？」

「ええ、ちよつと・・・上がってもいいかしら」

「別にいいけど」

訪問者はレミリア・スカーレット、吸血鬼の類。かれこれ五百年は生きているが、成長を放棄したので肉体はそのまま、老いることはなかった。

故に、十歳程度の身長、満月の日は我俣さで引けをとるものはいない。

「お邪魔するわね」

紅い瞳を少し見るとなんだか目眩がして、覗き込みはしなかった。

そのときから、彼女は少しずつ、侵されていたのだ。

「・・・あれから、魔理沙は私の通信人形を改造したの。で、魔理沙の「マジックピン」がおいてあるところならどこでも音が拾えるようになってるの」

「へえ・・・それは面白いことを聞いたわね」

「・・・で、雑談だけに来たわけじゃないでしょう？」

「察しがいいわね、流石は魔神の娘」

「五月蠅い。本題に入りなさいよ」

「そうね・・・貴女は、魔理沙を自分のモノにしたいと思ったこと、ない？」

「・・・ないわ」

「いつもより間があった。あるのね」

「ないわ」

「想い人を独占したい感情は誰にでもあるのよ？ 隠す必要はないわ」

「・・・何だつて言うの」

「単刀直入に言うとしたら・・・私と取引をしない？」

「内容は？」

「私がパチエを取り戻す協力をしてくれたら、魔理沙をあげるわ」

「・・・はあ？」

「私は、パチエを紅魔館に連れて帰る。貴方は、魔理沙を煮るなり焼くなり人形にするなり好きにして。その手伝いを、互いがする、つて言うのはどうかしら」

「・・・そんなことで魔理沙が喜ぶわけがない。絶対にやらないわよ」

「ふふ、まだ、そんなことが言えるの？」

「・・・？」

「魔理沙が、貴方のお人形になるのよ？ 嘘をつかない、従順な、貴女を愛する人形に・・・」

「・・・！！」

アリスが、唐突に目を見開く。

「どう？ 素晴らしいと思わない？ 誰にも、邪魔されることなく、二人きりで永遠を生きる・・・」

「やめ・・・て・・・そんなの・・・」

「しぶといわねえ・・・魔理沙の事、独り占めにしたいでしょう？」
テーブルにうつぶせて、端を握りこんで、何かに耐えている。

「さあ、素直になったほうがいいわよ。そのままこらえても、貴方

は何も得ない。どころか、失うことになる。・・・魔理沙とか」

「！！！」

「もう一度聞いわ、『私と、取引をしない？』」

「その取引・・・乗った・・・っ！」

息も絶え絶え、苦しそうにアリスは答えた。

その目は、深紅に染まっていた。

「ふふ、じゃあ、私は帰るわ。昼の子の刻、動けない程度に傷つけた魔理沙を、魔理沙の家の図書館で引き渡すから。よろしくね？」

「・・・わかったわ・・・」

白銀の燭代を眺めて、レミリアは去って行った。

外で、「ふ、ふふ、あっははははははは！！！」と言う笑い声が聞こえたのは気の所為か。

「っ！！！」

日は、現在。時間は、朝の辰の一つ。場所は、マーガトロイド邸、
寝室。

「何・・・どうして、今頃・・・あの日のことが・・・」

「『おはよう、アリス』」

「あ・・・魔理沙・・・どうして・・・しゃべってるの・・・」

「『さあ？ どうしてだろうな？』」

目に光はない。だが、表情はある。

顔だけを見れば、明るく笑っているが、目が死んでいる。と言うより、据わっている。

（あ・・・まさか、あの魔法が、魔理沙の深層心理に・・・やっとたどり着いたわけ・・・？）

「『もう、朝飯は出来たぜ。さ、起きろ』」

声に、やや表情が感じられない。抑揚や発音は魔理沙そのものだが、何かに言わされているような声。

ここに二人以外の誰かがいれば、魔理沙の目と声の不自然さを誰もが感じるはずだ。

「そうね。もう、こんな時間」

しかしアリスは、それを気にすることもなく、会話を進めている。おそらく、どうでもいいのだ。そんな『些細なこと』など。

魔理沙が、傍にいる。自分に笑っている。

それが、それだけあれば何もいらないうちでいるから。

「魔理沙。今夜、ちよつと一緒に来て欲しいんだけど・・・」

同時刻、霧雨邸、地下図書館。

「あれ・・・確かこの辺に・・・あ、あった」

パチュリーは、『DIMENSION（直訳して召喚）』と書かれた本を取り出す。

「火の精霊は他の精霊や神の類、拳句には妖怪や霊にまで友好関係がある・・・って確か『精霊の書』に書いてたから・・・あった。

えつと？ 『火の精霊 サラマンダーのみ、魔法陣を使って召喚する事が出来る』。ああ、この式ね。簡単じゃないの」

巨大な紙を空中に浮かせて、上から羽ペンを操り、式を書いていく。

「よし、後は・・・『魔力を多量に込めた炎で式の線の上をなぞる』

周囲の魔力は泥人形生成のため。使用できない。

自分自身の魔力を体から引き出し、小さいが濃度の非常に高い火球を作り出す。

それを、陣の線にあてると、たちまち魔法陣の上をなぞるように火が広がった。

「頼んだわよ・・・」

すると、紙が魔法陣から出た炎で焼失した直後に、収束して何かが見えた。

「・・・門、ね。あれは」

パチュリーの言う『門』が、僅かに揺らいた。

突如、収束した炎がどこかと繋がる穴の形に開く。

そこから、赤が基調の鎧を着た一人の少女が現れた。

「・・・いつも姿は見えないけれど、貴女は・・・」

「ええ、そうです。『七曜の精霊衆』が一人、『火の精霊 サラマ
ンダー』。どうか、サラとお呼びください・・・パチュリー様」

「わかったわ、サラ。・・・気の所為かしら、どこかで聞いたこと・
・・・」

「いいえ、別人かと。私、精霊界からは貴女との契約以来、出て来
ておりませんので」

「そう。ちよつと頼みたいことがあるんだけど」

「何でしょう。何なりとお申し付けを」

「・・・『吸血鬼の狂気』を解除する方法・・・ない？」

「・・・ごさいません、と言えばどれほど楽か・・・ないわ
けではごさいません。ただ、それは・・・」

「なに?! あるんだつたら、早く教えて! 一刻でも早く、レミ
イを戻さなくちゃいけないの!」

パチュリーは、サラの肩を掴み、焦りの表情で叫ぶ。

「あわわ、パチュリー様、少し落ち着いて・・・!」

「落ち着いてなんていられない! もう、レミイに時間はないの!
後数時間で、レミイは・・・フランドールみたいに・・・!」

「で、ですから、いまから説明を・・・放してください!・・・」
無意識に全力でサラの肩を握りこんでいたパチュリー。

それに気づくと、ぱつと手を放し、

「ご、ごめんなさい・・・で、どうすればレミイは元に戻るの?」

「その・・・ただ侵されているもののいいなりになるだけでは絶対
に何も変わりません。その思いを、受け止めて差し上げるのが、一
番、いいといわれています」

「レミイの・・・気持ちを・・・?」

「ただ、それはうわべの行動だけ直視してはおそらくわからない
でしょう。それは、おそらく・・・パチュリー様、貴女だけが解
つてあげられるのではないでしょうか」

「私が……」

「はい、私は、そう思いますが」

「……そう……ありがとう、サラ。私、ちょっとわかった気がするわ」

「そうですか。それは、何よりです」

サラは炎の精霊とは思えないほど優しく微笑み、パチュリーにこう言った。

「私は、そろそろ召喚の魔力が尽きるので、帰らなくてはなりません。でも、どうか覚えていてください。私は、貴女に期待しています。レミリア・スカーレットの途切れた運命の糸を、再び繋ぎなおすことを……」

パチュリーの手を強く握り、儚い光と共に消滅した。

「……怖かったの、ね……パチエ……貴女は、ずっと……」

「

その夜、満ちた月が全てを紅く照らし、妖を奮い立たせた。

理性を消し、衝動の赴くままに人を食らい、里は壊滅状態になる。

「こんな未来は……要らない!!」

《お前も、壊したいだろう？ さあ、迷うなよ。いまなら、お前の大事なもの、なんにもないぞ?》

「違う! そんなことを考えてなんて!」

《受け入れろよ、白沢。^{ハクタク}お前も、いまは所詮妖怪。あいつらみてえに、なんもかんもぶっこわしいのさ》

「ち……が……う……っ! 私は、そんなことは……っ!
!」

獣の角を持つ人は、人間の里の今夜の歴史を消し去った。自分の、今夜の記憶と共に。

「咲夜!」

紅魔館に、怒号が響く。

「はい、何かご用でしょうか」

動じる様子もなく、主の声に従者は答えた。

「何故、気づいていたのに空間制御機を切らなかったの?!」

「何のことでしょう」

飄々と嘘を吐いているが、全く焦りも恐れも見られない。

つきなれているわけではないが、主のための嘘、と割り切って言葉を出しているようだ。

「とぼけるんじゃないわよ! 空間制御機の魔力が9・924%吸い出されて、図書館の魔力増幅球にかけられてたのが、わからなかったの?!」

「お嬢様ほど鋭敏な魔法感知は私にはできませんので」

「ふん、まあいいわ! もう空間制御機は止めたし。咲夜、ついてきなさい。パチエを取り戻しに行くわよ」

「畏まりました」

深く辞儀をし、従者は主人に従って空に舞い上がった。

「アリス! 行きましょう!」

「・・・何、私と魔理沙の時間を邪魔しないで」

マーガトロイド邸に、誘いの声が響いた。

当のアリスは月の所為か少し苛立ち気味で、愛する魔法使いとの夕食を邪魔されたことに立腹。

「約束だったわよね? 魔理沙をあなたのものにする手伝いと引き換えに、パチエを私のものにする手伝いをする、って」

「忘れたわね。そんな約束」

「とぼけないで。あんまり馬鹿なことを言つと・・・滅ぼすわよ」

「私を? 魔理沙、追い払って」

「『わかった。・・・レミリア、私とアリスの、食事の邪魔をするな。何度でも殺してやるぞ』」

「・・・ふん。貴女ごときが私を一度でも殺せると思う?」

「五月蠅いわね。わかったわよ、そのうちあの紫もやしはどうにか

しないといけないとは思ってたしね」

「『わかった、じゃあもう少ししたら行こうぜ』」

「じゃあ、それまで、私は月の光でも浴びてくるわ。今夜は、飛びきり綺麗なの」

深紅に染まる、その空へ飛びたったのは、眩いた直後だった。

後日談／after event: last day 2 (後書き)

さて、もうそろそろ終わると思ってたら大間違いである可能性大ですよ?!

後日談／after event：last day 3（前書き）

さあ、最終決戦の始まりですね。

とりあえずはじめは劣勢、フランちゃんも敢え無く敗退。

霊夢もフルボッコ。

さあ、どうするよパチエ！！

後日談　a f t e r　e v e n t : l a s t　d a y　3

「パチュリー！」

霧雨邸、図書館にて。

「・・・霊夢。そろそろね？」

落ち着いた声で、走ってきた霊夢の話を聞く体制に入る。

「そろそろ何も、もう来たわよ！」

「結界は？」

「あるわけないじゃないの！」

「泥人形の生成は？」

「止まってるわよ！」

「再生は？」

「もうしばらく大丈夫よ」

「・・・そう。フランドールを、指示に行かせて」

少しずつ、声が震えていく。

「あんたは?!」

「・・・ごめんなさい・・・足が竦んで・・・」

最後には、やっとのことで声を絞り出しているようにも見える。

「つたく、これじゃあどっちが当事者なんだか・・・！　落ち着い

たら、すぐ来なさいよ！」

「ええ・・・わかったわ」

（霊夢・・・わかってないわね。当事者しかわからない恐怖だつてあるのに・・・）

霊夢が、懷にスペルカードを忍ばせ、去って行った。

パチュリーは、全ては自らのお膳立てした舞台であるにもかかわらず、恐怖していた。

何かに・・・おそらく、前日に来た時の魔理沙に。

冷たく、表情のない、今のパチュリーにとって最悪の事態。

それが、また自分のところに、今度は自分を滅ぼしに来る・・・絶

対に考えたくないことだった。

「どうしよう・・・怖い・・・魔理沙なのに・・・」

一方、外では。

「・・・何あれ・・・気持ち悪・・・」

「やばい・・・あれはない・・・」

「『私がいつぱいいるぜ・・・あと霊夢も・・・』」

「じゃあ、取り敢えずぶつとば・・・」

『恋符「マスタースパーク」!』

量産型魔理沙たちから、ものすごい数のマスタースパークが放たれた。

「なっ!」

「出力は三分の一程度・・・いける!」

レミリアは、グングニルに似た、しかしやや細めの槍を取り出す。

「はああああ・・・!」

ゆっくりと息を吐き、その槍を投げた。

そしてマスタースパークを包み込むように槍が一つの膜と化し、マスタースパークを確かに受け止めた。

手のひらに乗る程度の球体にまで収縮すると、アリスを箒に乗せている魔理沙の手元に飛んで行った。

「・・・魔理沙、それ、スペルカード化できない?」

「『えつと・・・。よし、これでいいか?』」

魔理沙は、その手にあつた球体を一枚のカードと化した。

「『マスタースパーク・・・みたいだが・・・?』」

「それ、撃つてみて」

「『わかつたぜ』」

地上に降りてから魔理沙がカードを発動させる。

球体が現れ、周囲の魔力を吸い始めた。

泥人形の魔力がどんどん吸われていく。

それがいつしか銀色の光を放ち始めた。

「『いつけ　　！』」

マスターパーク、いやファイナルパークの数倍の威力を持って
いそうな白銀の魔法が放たれた。

最後に僅かに残った泥人形達がいつせいに群がり、霧雨邸を守つ
た。

それで泥人形は打ち止め。魔力が全て吸われ、生成するためのコピ
ーが存在しなくなったからだ。

「く、やっぱ最後はこうなるわけ・・・」

「いいよ別に、私は壊すの好きだから」

「さすが魔法泥土。消滅が早いわね」

「さあね・・・来るわよ！」

「『アリス、私の後ろに！』」

「霊夢・・・戦況は・・・？」

「あんたが来ないせいで、最悪よ！　　ったく、どうにかならないわ
け？！」

「仕方ないよ。パチュリーは今の魔理沙が、怖いんだから」

パチュリーは、霊夢とフランドールに持たせた通信魔法で会話を
する。

「人形は全滅！　魔力が底尽きたからもう再生もできないし！」

「後は私たちだけ・・・なるべく早くお願いね！」

「・・・ごめんなさい・・・」

「謝るのは後、とつとと恐怖を克服してきなさいよ！」

「大結界『博麗弾幕結界』！」

「禁弾『過去を刻む時計』！」

霊夢の、微細な動きでのみ回避可能な弾幕＋フランドールの大きく
かわす必要のある弾幕。

二つの併せによって、三人はややおされた。だが、
「『邪恋』実りやすいマスターパーク』！』」

「『紅色の幻想郷』！」

「操符『乙女文楽』！」

簡単に盛り返してみせる。

「火力では圧倒的・・・なら！」

霊夢は突如姿を消し、三人の上に浮いた。

「宝符『躍る陰陽玉』！」

四つの青い陰陽玉が飛びだし、レミリアを集中砲火。

「禁弾『スターボウブレイク』！」

霊夢に氣をとられている隙に、フランドールはスターボウを放つ。
この程度でダメージを食らう彼女たちではない。

三人は戦い方を切り替え、ジャブで削っていくことにした。
といっても、この三人のいう『ジャブ』は狂的なまでに強いので、
それで充分だった。

「夜王『ドラキュラクレイドル』！」

広範囲低威力型に切り替えたクレイドル。

「呪符『ストロードールカミカゼ』！」

それなりに数を減らした人形。

「魔符『ミルキーウェイ』！」

威力こそ低めだが数の多い星弾。

霊夢とフランドールに無数の攻撃が降り注ぐ。

「決めるっ！紅符『不夜城レッド』！」

深紅の波紋が、霊夢とフランドールを包む。

「はああああああああつ！」

二人の身を切り裂き、焦がし、瀕死状態に陥る。

「・・・アリス！」

「わかってるわよ！」

霊夢の腕についていたミサングの形をした通信魔術を、アリスは
引きちぎった。

「組み換えは・・・以外と簡単ね」

「早くしなさいよ」

「……よし、終わった。じゃあ行くわよ」

後日談／after event: last day 3（後書き）

ないです。正直ここまでくると次の予告くらいしか。

でもそれしたら面白くないし・・・。

はい。魔理沙の台詞にある「『~~~~』」て言う二重かぎはなんでもないです。仕様です。

後日談／after event:last day 4（前書き）

三日目もいい加減にしろ。

えっと、怖がりパチエが、泣き落として魔理沙を取り戻しちゃいます。

怖いです。パチエのためなら、魔理沙は友達もぬつ殺しちゃいます。はい、でも死にませんよ。

後日談　after event：last day 4

図書館の中で、パチユリーはただ、震えていた。

「こんなのが、私の望んだことなの・・・？」

魔理沙だけ救えば、こうはならなかったのか。

レミリアに従っていれば、こうはならなかったのか。

自責、悔恨、自己嫌悪。なにが今に繋がったのか。

答えは一つだが、まっすぐ見据えられない。

怖くて、直視できない。

その直後。

『ぱ・・・りー』

通信から、ノイズだらけの音が入る。

「ん・・・？」

『パチユリー・・・聞こ・・・て・・・？』

「フランドール？　どうしたの？」

入ってきたのは、フランドールの声だった。

『あ・・・お・・・うちに・・・て・・・』

やたら焦っているようだが、雑音でほとんど聞こえない。

「どうしたの？！　フランドール？！」

『い・・・で・・・げて・・・ぱちゅ・・・』

「聞こえない・・・通信魔術の妨害？！」

「当たり前よね。生き物の身体を高密度・多量の情報に置き換えて通信回路を独占したんだから。むしろ、少しでも聞こえるほうが奇跡なんじゃないかしら？」

白い空間が、裂けて出てきた。そして・・・

「扉が開かなかったから、魔法使ってきてみたわよ、パチエ」

黒、蒼、紅の三人の少女が、机の目の前に現れた。

『パチユリー！　アリスとお姉さまがそっちに向かっているの！　急いで、あなただけでも逃げて！』

「もう遅いわよ・・・」

後に退く道はない。進むにも壁がある。横道などあるわけもない。震えが止まらない。

魔理沙が、目の前でアリスを庇うように立っている。

そして、アリスと手を握っている。

思わず、目をそらしてしまう。

「魔理沙が、私のモノだって、わかったでしょ？ ふふふふふふ・・・」

「黙りなさいアリス。・・・もう、手加減しない。パチエ、貴女の為だったら、何だってやるって、決めたの。だから、あなたを少し傷つけてしまいかもしれない。でもそれは・・・貴女が抵抗したらだからね？」

以前と同じ、ほぼ一瞬でパチユリーに近付く。

鳩尾の突きを、パチユリーはレミリアを本で殴り飛ばしてかわす。

「これくらい・・・しなきゃ・・・貴女が・・・止まらないんだから・・・！」

「痛いじゃないの・・・パチエ。貴女もそれなりに本気、ってことでとっていいのね」

「ええ・・・はあっ！」

本を開き、巨大な炎弾を繰り出す。

「甘いわね、パチエ！」

直線的なその炎弾は、かわすに造作のないもの。

レミリアはひらりと身を回転させ、優雅かつ無駄のない最低限の動きでかわす。

ちようどギリギリのところで踏みとどまり、パチユリーへと跳ぶ。

「お見通しよ・・・！」

素早い、それなりに規則のある動き。そこに予想経路を瞬く間に立て、水の弾を飛ばした。

「そうそう当たったりするもんですか！ 流れ水は天敵・・・それに関してほぼ完璧な動体視力を発揮できるのよ?!」

華麗なステップ、完璧なまでの見切り。

だがそれは、水弾に最大限の集中を向けている・・・他からの攻撃には一切対応できないほどに。

「鈍いわね、パチエ。私が、そんなことも知らないとても？」

「えっ？」

レミリアの背後・・・すぐ後ろに、複数の小炎弾が迫っていた。爆発、ついでに数発の水弾に当たり、弾き飛ばされた。

「くっ・・・！！」

「これで・・・なんとか・・・レミィは押さえた・・・！」

「あ・・・アリス！」

「何よ」

「反撃して！」

「だれの？」

「私の！」

「・・・わかったわよ。・・・魔理沙！」

「『おう、任せとけ』」

魔理沙が、喋った？

魔法で精神を封印しているはずの、魔理沙が？

どうして？ 自我が戻ってきたの・・・？

でも、でも、どうして・・・だとしたら・・・私のところに・・・戻って・・・来る筈・・・。

「『光符『アースライトレイ』・・・』」

ひよっとしたら、ひよっとしたら

「魔

理沙が私のことを好き」なのは、ただの傲慢なのかもしれない。

魔理沙は本当はアリスが好きで、私には本のために近付いたのかも

私が、ただ思い込んでいただけかもしれない

「魔理沙・・・魔理沙・・・たえそうだとしても、私は・・・
・あなたのことが、好きだから」

星屑のように、薄く儚く、そこにいるだけでかわせる弾幕。
その後ろから、同じくそこにいるだけでかわせるレーザーが撃たれる。

「私は、このまま朽ちてもいい・・・貴女を想う気持ちを持って滅びるのなら、恐ろしいものなんてないもの」

なぜ、どうして?! 何でそこまでこの白黒魔女を好きでいられるの?! 殺されそうなのに、こんなに飄々としていられる理由は、何なの?!

こんなにも追い込まれて、なお冷静で微塵も揺るがない理由・・・!
・・・やっぱり、あの魔女のこと、最期の最期まで好きでいる気ね・・・。

捕まえても、私に従っていても、どうせあの魔女のことを想い続ける・・・。

どうして、どうして私じゃないの? ずっと前からいて、たくさん
のことを知ってて、今誰より貴女の事を好きなのに・・・。

どうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうして
してどうしてどうして・・・。

・・・そうね。

私のものにならない貴女は、要らないわ。

どうせ、魔法で作りなおせる。

私は、天才だもの。

また、『パチエ』を作ればいい。

この『パチエ』は、要らない。

一度壊して、情報をコピーして、肉体を再構築して、アリスの作った
擬似人格を入れればいい。

そうと決まれば・・・動けない私に代わって、この魔理沙に、とどめを刺させればいい。

「魔理沙に、必殺の一撃をぶつけさせなさい」

「・・・あんた、本気？ いや、正気？」

「始めから、貴女も私も正気なんてなかったわ。さあ、やって」

「って・・・ほんとにいいの？」

「後で肉体の情報をとるから、肉片一つは残しておいて。あと、『パチエ』の人格の編集システムを構築しておいて。もう、『パチエ』の精神はコピー済み」

「じゃなくて、あんたの好きな子なんでしょ？ いいの？ 殺しちやって」

「創り直すわ。私を好きでいないパチエなんて、要らないもの。早く、魔理沙に撃たせなさいよ、最後の―一撃を」

「・・・まあ、私も何とかしなくちゃとは思ってたし・・・わかったわ、魔理沙、『ファイナルマスタースパーク』を」

「『わかったぜ』」

魔理沙は、スペルカードを唱え上げ、手を構える。

おそらく魔理沙の魔法の中で火力は最高峰、マスタースパークの最高派生。

「『いつばいまで魔力を収縮したほうがいいか？』」

「ええ、そうして。一撃で、決めて」

その虚ろな目は、何も語らず、表情だけを作っている。

心が無い・・・そんな表現が最も似合うその魔理沙の姿を、パチュリーは見えていなかった。

アリスと正反対。いや、同じだろうか。

今の彼女には、『魔理沙がアリスを守ろうとしている』という事実が、何より重くのしかかり、他の『余事』には、目が一切いかなかったのだから・・・。

「『誰だかは知らないが、悪く思うな。アリスは、お前が滅べばい

「いと思っっているから、私はここでお前を殺さなくちゃいけないんだ」

「・・・私を、覚えてないの・・・？ 魔理沙・・・」

「『見たこともないぜ、お前なんか。・・・なんで、そんな事を言うんだ？』」

「・・・紅霧異変で、私の図書館にきたでしょ・・・それに、私とも戦って・・・」

「『確かに紅魔館には図書館があったが・・・お前と戦ってなんてないぜ。いたのは、小悪魔一匹だけだ』」

魔理沙にとって、私は、その程度の存在だったの？

私は、軽くあしらわれる程度の存在なの？
信じたくない。

怖い、魔理沙が。・・・一番大好きな人が、とっても怖い。

近付こうとすればするほど、傷ついて・・・

最後に待っていたのは、拒絶。

どうしようもない、魔理沙の感情・・・。

それが、魔理沙。

貴女の答えでも、構わないわ。

それでも、どうして？

涙が、涙がぜんぜん止まらないの。

貴女に拒絶された、って、そう考えるだけで、私・・・悲しくて、

哀しくて・・・。

やっぱり、私は、弱い。

貴女を守れない。

ごめんなさい。

こんなに、貴女が愛しいのに。

貴女を、救えない。

こんなに、貴女にたくさん、いろいろなものをもらったのに。

貴女に、何一つ返した覚えが無い。

こんなに、貴女と一緒にいたいのに。

貴女に、近づけない。

こんな逆境・・・貴女なら簡単に跳ね返せるのに、私は・・・。

ごめんなさい。そして、ありがとう。最後に

魔理沙、愛してる。

「さあ、魔理沙。決めてやんなさい」

「『あ、ああ・・・』」

魔理沙の奴、こんなのに祈りの時間をあげる必要なんて無いのに・

・！

とつとと、とどめを刺さないと何をしでかすか・・・っ！

何、あの白黒、止まっただまじゃないの。

とつとと殺しなさいよ。

あんな『パチエ』、さっさと消し炭にしなさいよ。

早く。

こんなことに、時間を費やすわけにはいかないのよ。

帰って、魔法で肉体を再構築して、私を好きな『パチエ』を作りなおす必要があるのよ。

さあ、白黒。

この『パチエ』を、破壊しなさい・・・ぶっ壊しなさいよ！！

あれ・・・？

私、なんで、止まっただま・・・？

目の前で、知らない奴が泣いてて。

それが、何の関係がある？

でも、妙に胸が騒ぐ・・・！

何だ？これは。

『もう二度と見たくない。お前の泣き顔なんて』

・・・いつ、誰が言った？

『離れたくない、もう二度と』

・・・いや、まだ言ってない。

『約束したろ。あの魔法、もう少しなんだ・・・お前と、創りたい』

・・・言いたかった・・・？ この、紫色に・・・？

何を、考えているんだ・・・？

私は、こんな見ず知らずの奴に、こんなこと・・・。

いや、よく思い出してみろ。

忘れてなんてない筈だろ？

こんなに、こんなに、こいつの涙が、私の奥底に爪を立てている。

そんな奴の事、忘れるはず・・・。

っ！！

パチュリー！

何だって私は、こいつの事が、思い出せなかった？！

私が、この世界で、一番好きだったのは、パチュリーじゃなかったか？！

目の前で、こんなに、辛そうに、涙を流しているのに。

私は、どうして、何もしていないんだ？

こんなに、こいつは、私の事を想って泣いているのに。

私は、どうして、こいつに魔砲を向けているんだ？

どうして、私は、アリスに従ってるんだ・・・・・・？

いや、そんなことはどうでもいい。

私は、アリスに、パチュリーを泣かせる奴に従う理由なんて・・・
無い。

パチュリーが、こんなにも苦しそうなのに。

助けることに、理由なんて無粋にも程があるだろ？

こんなこと、迷うわけないだろ？

さあ、振り向け。

そして、放て

渾身の一撃を――！

「すまないな、アリス。私は、お前のこと、嫌いじゃないが・・・パチュリーへの気持ちとは、違うんだ」

「え？」

「生きてたら、また会おうぜ」

銀色の光を放つ、最大出力の『魔砲「ファイナルマスタースパーク」』。

まだ火力を注ぎ込んだだけで、制御系の式を組み込んでいなかった所為か、爆発的な威力を持つてそれは放たれた。

「魔理沙、魔理沙・・・どうして・・・私を、裏切ったの・・・！」

「お前の側についていた覚えは無い。だろ？　こんなに、パチュリーを泣かせる奴に、味方するわけがない。私は、お前を好きになつた覚えはないんだ」

白銀の高密度魔力に焼かれ、『七色の人形遣い』は叫ぶ。

自らの愛した、魔術師・・・その名を。

魔界から来た者は、自らの命が危険にさらされると、自らが最も効率的に身体を修復できるところに、体が強制的に転移するらしい。

銀色の光を撃ち終わると、そこにアリスの姿はなかった。

家に帰ったんだな・・・と魔理沙が思っていると、

「魔理沙！」

「・・・ただいま、パチュリー」

宙に浮かず、自らの足で魔理沙の胸に飛びこむ。

今度は、魔理沙はしっかりと受け止められた。

その気持ちを吐き出すように、その想いを魔理沙にぶつけるように、パチュリーは叫んだ。

「どうしていなくなったりしたのよ！　あるとき、どうしてあんなこと言ったのよ！」

「・・・そうだよな。すまない。全部、私が悪かった。・・・一人で、何でも背負い込める、って思ってた。そうしなきゃいけない、って思ってた。違うんだよな。私は、お前の助けがなきゃ、駄目なんだ。・・・お前と言う存在が、助けてくれなきゃ、私は何もできない。・・・ごめんな、パチュリー」

「馬鹿！ 馬鹿！ ・・・っ、私も、そうだから！ 貴女がいないと、私、何も出来なくて・・・！」

しがみついて、魔理沙の耳元でパチュリーは叫ぶ。
多少の嗚咽も聞こえている。

・・・泣いているのは、どちらの意味なのだろう。
そんな事を考えていると、自然と言葉が出てくる。

「そんなことない。お前は、ここまでできただろ？ お前は、それだけする勇気がある。それで、いいんじゃないか？」

「そんなことない！ 貴女なら、すぐにこんな逆境・・・！」

「さあ？ そうでもないぜ。・・・でも、ここから先なら、任せとけ。後は、私が片付ける・・・手伝って、くれるな？」

「・・・わかった。貴女を、全力で支えてあげる」

魔理沙が、何も言わずに満面の笑顔で応えた。

後日談／after event: last day 4 (後書き)

次くらいで最後です。

でも、真夜中の空気ってなんか澄んでますよね。

出歩いたことないですけど。

後日談・最終話

魔砲使いと日陰の少女 The Embodiment

最終話と言うことでタイトルをかえてみました。
クライマックスは、とりあえずその目でお確かめを。

「何よ！　どいつもこいつも、私を置き去りにして！　私の、何がいけないっていうのよ！」

レミリアが唐突に叫ぶ。

そして、覚悟の決まった顔で、

「レミィ・・・貴女は、怖かったんでしょ？」

パチュリーは言い放つ。

「何だつて言うのよ、私が、この『スカーレットデビル紅い悪魔』が何をおそれるって言うの？！」

「さつき、言つてたじゃない。置き去りにされる、つて。・・・貴女は、私が、貴女を忘れて、魔理沙だけ見えていると思つていたんでしょ？」

「そうでしょ！　私が、どれだけ話したつて、貴女は私に見向きもしなかった！　それが、事実じゃないの！」

「私は、貴方を捨てたりしない・・・いいえ、傲慢だったわね。・・・

・・・私は、貴女を忘れられない。忘れたくない。貴女は、たった一人の親友・・・それだけは、変わらない」

「嘘よ！　今までがそうだったのに、これからは違つても言うの？！」

「・・・貴女は、忘れてしまったの？　私と、いた時の事を」

「忘れてない！」

「じゃあ、どうして私たちは友達なんだと思う？　ただ、本のためだけにそんな事を言っているわけじゃないつて、貴女もわかつてるでしょ」

「私が、一方的に・・・」

「いいえ、私が、言い出したの。貴女が悲しかったときは、私がたまに慰めて、貴方が嬉しいときは、一緒に喜んであげた。・・・それが、楽しかったから、私は、貴女と友達でいたかった」

「嘘も、いい加減にしてよ！」

「違う。貴方が認めたくないだけ。私は、貴女に、真実を言っているだけ」

「違う！！ 私は、私は・・・恐れてなんてない！ 誰よりも誇り高い吸血鬼の一族『スカーレット』が、忘れられる事を恐れるなんて！ ありえない！」

「パチュリー。どうしてだ？ こんなにも記憶の違いなんて、何かの病気・・・？」

「ええ、そんなところ」

「この『パチエ』は、要らない・・・！ とつても不愉快よ・・・！ 殺してやる・・・殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる・・・！」

「・・・いくら偉大な魔術師でも、命は創れない。そんな事をすれば、どうなるか、貴女はわかつてる筈よ」

「そんなわけない・・・私にできない魔法は、ない・・・！ 現に、こうして・・・」

その手元には、青く輝く光が宿っていた。

「マスターパークが撃てる！！」

「パチュリー！」

「大丈夫よ、魔理沙。まがいの紛い物のマスターパークなんて、怖いわけがない」

パチュリーに近づくマスターパーク。

動じないパチュリー。

これはやばい、とギリギリで叩き落とす準備をしておく、魔理沙。一定のラインを超えた直後、

「咲夜！」

叫んだのと、魔理沙が動いたのは、ほぼ同時。

「恋心『ダブルスパーク』！！」

「時符『咲夜特製ストップウォッチ』！！」

時計型の魔法が、マスターパークの動きを止め、ダブルスパーク

が相殺。

パチュリーは、こう叫ぶことによって魔法が発動するように、仕掛けておいたのだ。

いつ起こるかわからない、不測の事態にそなえて。その場でも、絶対にしくじらない方法で。

「偽者なんて、所詮はこの程度。・・・レミィ」

「何よ?!」

「私は、貴方を忘れたりしない。だから、私達を、認めてくれない?」

「そんなことできるわけじゃないの!」

ぎゅつと目を閉じ、強く拳を握り、レミリアは叫んだ。

「私が、貴女達を引き離すためにこんな事をしたんだから・・・いまさら、止められるわけ・・・!」

「・・・レミリア」

魔理沙が、呼ぶ。

目を瞑り、下を向いているレミリアは、その落ち着きのある声に顔を上げた。

「・・・あ・・・」

そこにいたのは、当然、魔理沙とパチュリー。

二人は、アリスの時よりもずっとずっと強く、そして優しく、互いを愛しむ（いつくしむ）様に、手を取り合っている。

そして、ふと魔理沙が空いているほうの手を伸ばす。

「・・・お前も、私たちの仲間だ」

続いて、パチュリーが、もう片方の手を差し出す。

「・・・一緒に、いて?」

それが、二人の答え。

今まで貴女がしてきたことなんて、関係ない。

ただ、貴女が貴女でいる限り、貴女は私たちにとって、大切な存在。だから、一緒にいよう、レミリア。

「・・・知らない」

「・・・・・・・・」

沈黙。

「『紅い悪魔』・・・そのプライドにかけて、ここで折れるわけにはいかない」

「そうか。・・・どうすれば、いい？ パチュリー」

「・・・私に、それを聞くの？」

「・・・そうだな。少しの間、支えてくれるか？」

「ええ。任せておいて」

「その名を継いだあの日から、私はもう・・・!!」

レミリアが手を空にかざし、詠唱する。

そして、パチュリーは、魔理沙の脇に掴まり、その背に額をあてている。

魔理沙は手を前に構え、詠唱文を呟いている。

レミリアの頭上に、真紅に輝く紅符『不夜城レッド』ほど太い槍が、現れる。

魔法で支え、魔法で収束していくその槍は、まさしく神槍・・・いや、業槍。

全てを破壊し尽くす、今のレミリアの全力の証。

魔理沙の手に、蒼い稲妻の走る球体が現れる。

今にも弾けそうなほど揺らいでいるその球体を支えるのは、魔理沙の気力と、パチュリーの魔力。

二人でないと完成しないこの魔法は、まさしく二人の絆の権化といえる。

「魔槍『ラグナロクスピア』!!」

真紅に染まるその槍が放たれるのと、

「魔法『ギアスパーク』!!」

白銀と蒼碧を持つ光が放たれるのは、同時。

一点集中型の槍は、間違いなく魔理沙とパチュリーを貫く。

それを知つての上、全力で放つた魔法。

三日前、二人の言つていた「拡散式スパーク」、その完成体ともいえるものが、これだった。

光が分散し、槍のところどころに入り込む。

だんだんとひびが入り、最後は真正面からの小さな一閃で砕かれた。「っな?!」

唯一つ、レミリアに向かつていた光が、彼女をひといきで貫いた。

「レミリア、これが・・・私たちの・・・絆だ」

貫かれた瞬間、魔理沙とパチュリーの想いが、少し、伝わってきた気がした。

いや、確かに、二人の気持ちを受け取つたのだ。

だからこそ、ここで負けを認めて、後ろへ倒れこんだのだ。

「パチエ・・・なんて言えばいいのかしら・・・」

「何も、言わなくていいわ。ただ、私の手を取ってくれば、それで」

「ほら、手を貸すぜ」

確かに、私は怖かつたのかも。

『紅い悪魔』だからと、意地を張つて、恐怖から逃げただけかも。

パチエに忘れられるのが、こんなにも恐ろしいとは思わなかった。

嫌だった。ものすごく、嫌だった。ただ、パチュリーを『私』に縛り付けてしまえば、忘れないと思つて、こんな事をしていた。

だからこそ、私は、二人の手を、取れなかった。

眩しすぎる。暖かすぎる。吸血鬼には、あまりにも不似合いな、幸福がそこにはある。

目を背けたい、逸らしたい。

私には、こんな幸福、許されるはずがない。

吸血鬼・・・夜を飛び、血を求む事を何よりの快樂とする生き物。そんな罪深い生き物に、こんな眩しいもの、似合わない。

たとえ狂気に侵されているのだとしても、この記憶は、罪は、消えるわけじゃない。

だから、私はあえて二人の手を取らず、一人で起き上がった。

「私は、紅魔館で待つてるから。会いたくなったら、来て・・・魔理沙、パチエ」

「・・・ええ、わかったわ。たまには、そっちが来てよね？」

「・・・ああ。また、いつか。必ず会いに行くからな。そのときは、魔法を教えてくださいよ？」

「・・・ええ」

二人の要望を、一言で返し、空へと飛びたった。

時は宵の寅の一つ（四時半程度）。

真紅の月は、全てを鮮明に映し出し、喰らわれた歴史の跡すら薄く現している。

その空を飛ぶ、『紅い悪魔』。

その目には、風の所為か、それとも別の理由か、雫が溜まっている。しかしその表情は、口元を少し嬉しそうに曲げていた。

「お帰りなさいませ、お嬢様」

深く辞儀をし、従者は主人を迎えた。

「ただいま、咲夜。アリスの家に行く途中で、道に迷ったんでしょ？」

「恥ずかしながら・・・」

「いいのよ。私は、もうあんなことしないもの」

もう一度、従者は深く辞儀をし、

「・・・お帰りなさいませ、お嬢様」

「・・・ただいま、咲夜」

主の、帰来を迎えた。

今度は、しっかりと、主は従者を見つめていた。

「上海、今夜の月は綺麗ね」

「シャンハイ」

「・・・私、本当は『パチュリーを想う魔理沙』が、好きだったのかも」

「シャンハイ」

「・・・そうね。こんなに綺麗な月に、ワインを開けないのはどうかしてたわね」

「シャンハイ」

傷だらけの人形師は、椅子を立ち、洋酒を取りに酒蔵へ向かった。

夜明けも近付く、寅の三つ（五時半程度）。

月は色を薄くし、青い光が空にかかり始めた。

「・・・ねえ、フランドール」

「何？ 霊夢」

「あの子達、うまくいったのかしらね」

「さあ？ でも、まあ、何か帰ってもいいかな・・・って思ってるの」

「いいんじゃない？」

「でさあ」

「何？」

「いつになったら、出てくるのかしら、あの二人は」

「さあね。風邪ひかないように、もう帰ったら？」

「・・・見に行くのはどう？」

「さんせー」

「おい、魔理沙？」

「パチュリー？」

二人が図書館の扉を開くと、魔理沙とパチュリーは、床に横たわり、寄り添って眠っていた。

強く、強く、手を握りあって。

「何だこいつら。マジむかつく」

「まあまあ、霊夢。とりあえず、この部屋のベッドがあるはずだから、そこに運ぼう?」

「・・・たく、仕方ないわね・・・」

手を離させようとして、ふと霊夢は手を止めた。

「どうしたの?」

そして、『ふっ』と微笑み、

「見てよこの二人。すごく、幸せそうな顔してる」

「そうだね」

霊夢は立ち上がり、踵を返した。

「しばらく、放つときましょ。こんな二人を見てたら、何だか運ぶのが無粋に思えてきたわ」

もう、陽はのぼりはじめていた

魔法使いと日陰の少女 } Locked girl .

fin

さて。

ここまで読んでいるのなら、もう言うことはこれしかないです。

「ありがとうございますー！（帽子を脱いで礼）」

あ、いい忘れてましたけど、これはもともと一つのwordファイ
ルだったわけでした。

もしちよつと変なところがあったら、連絡くださいな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8529d/>

魔砲使いと日陰の少女 ~ Locked girl.

2010年10月10日14時53分発行